

徳島県諸方言アクセントについて

石田 祐子・岸江 信介

The Variety of Accents in the Tokushima Dialects

Yuko ISHIDA, Shinsuke KISHIE

Abstract

This paper aims to clarify the variety of Accents in the Tokushima dialects. In 1999, we visited more than a hundred villages in Tokushima prefecture to classify Tokushima accents. According to this survey, Tokushima accents are divided mainly into six types. We examine these accents through Tokushima accent maps we made as a database.

1. はじめに

ここでは、徳島県における諸方言アクセントについて取り上げ、主に言語地理的な観点からその特色について述べることを目的とする。また、同時に県下各地に認められるアクセント体系に触れ、その特色について言及することにした。

これまで徳島県の諸方言アクセントに関して、いくつかの体系的・方言地理学的研究が行われてきた。とりわけ、森（1952・1982ほか）に代表される全県下を対象としたアクセント研究は調査地点の上で他の府県では例をみないほど密度が濃く、このデータをもとに徳島県下におけるアクセント分布の区画を行っている。以下ではこれら先行研究を参考にし、今回実施した徳島県アクセント調査結果をもとに徳島県アクセント地図として掲げ、県内での地域差について触れてみることにしたい。

今回行ったアクセント調査は主に県内でのアクセント分布に焦点を当てているが、面接調査を通じて得られたデータをデータベースソフトであるファイルメーカー PRO を利用して、言語地図化をはかることを目標とした。また、調査時に収録した各地話者の読み上げによるアクセントをパソコンに取り込み、音声言語地図を試作した。これらの方法についてはそれぞれ1999年度～2000年度において行われた西日本国語国文学データベース研究会、日本方言研究会、日本音声学会全国大会などで口頭発表を行った。

2. 徳島県諸方言アクセント体系

徳島市域を中心とする徳島県東部では、京都・大阪などで代表される京阪式アクセント（以下、中央式アクセントと呼ぶ）が広く認められるのに対して、池田町を中心とする県西部に讃岐式アクセント、一字村・山城町・木頭村などの山間域には、体系的に東京式アクセントと同種の垂井式アクセントが認められる。まず、徳島県下での諸方言アクセントの体系について、主な代表地点を掲げ、順に見ていくことにしたい。

2-1. 徳島市式アクセント

徳島市を含む県東部地域の大半がこれと同じアクセント体系である。京都・大阪と同じ体系であり、中央式アクセントと呼ばれるものであるが、ここではその下位分類として、徳島市式アクセントと呼んでおく。

このアクセントの音調型（実現型）とアクセント体系を徳島市国府町、佐野治良氏（大正4年生まれ）によって示す。各アクセント型の代表となる音調型は以下のとおりである。

表1 徳島市アクセントの音調型

A	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	「チガ	「タケ	「クルマ	「ニホンゴ	「オンドケイ	「イイマチガイ
1	「ハ」ガ	「オ」ト	「チ」カラ	「ア」カチャン	「レ」ストラ	「ソ」ンチョーサン
2			「ヒガ」シ	「フリ」ソデ	「セバ」ンゴ	X
3				「アオゾ」ラ	「アワジ」シマ	「キクニ」ンギョー
4				「セカイチ」ズ	「アメリカ」ジン	
5						「バクハツジ」コ
B	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	キ「オ	イ「ト	ウサ「ギ	ハリ「ガネ	アカ「トンボ	フル「シンブン
1		サ「ル」	ク「ス」リ	ヨ「ワ」ムシ	オ「ツ」キサマ	オ「イ」ナリサン
2				シヤ「ク」シヨ	サカ「ア」ガリ	ミソ「ラ」ーメン
3					ケイ「サツ」シヨ	オバケ「ヤ」シキ
4						ジ「ドーシャジ」コ

※表中の X は、調査語彙中に該当する語がなかったもの。但し、中井・高田・大和（1999）で示された高田豊輝氏の音調一覧には存在する。

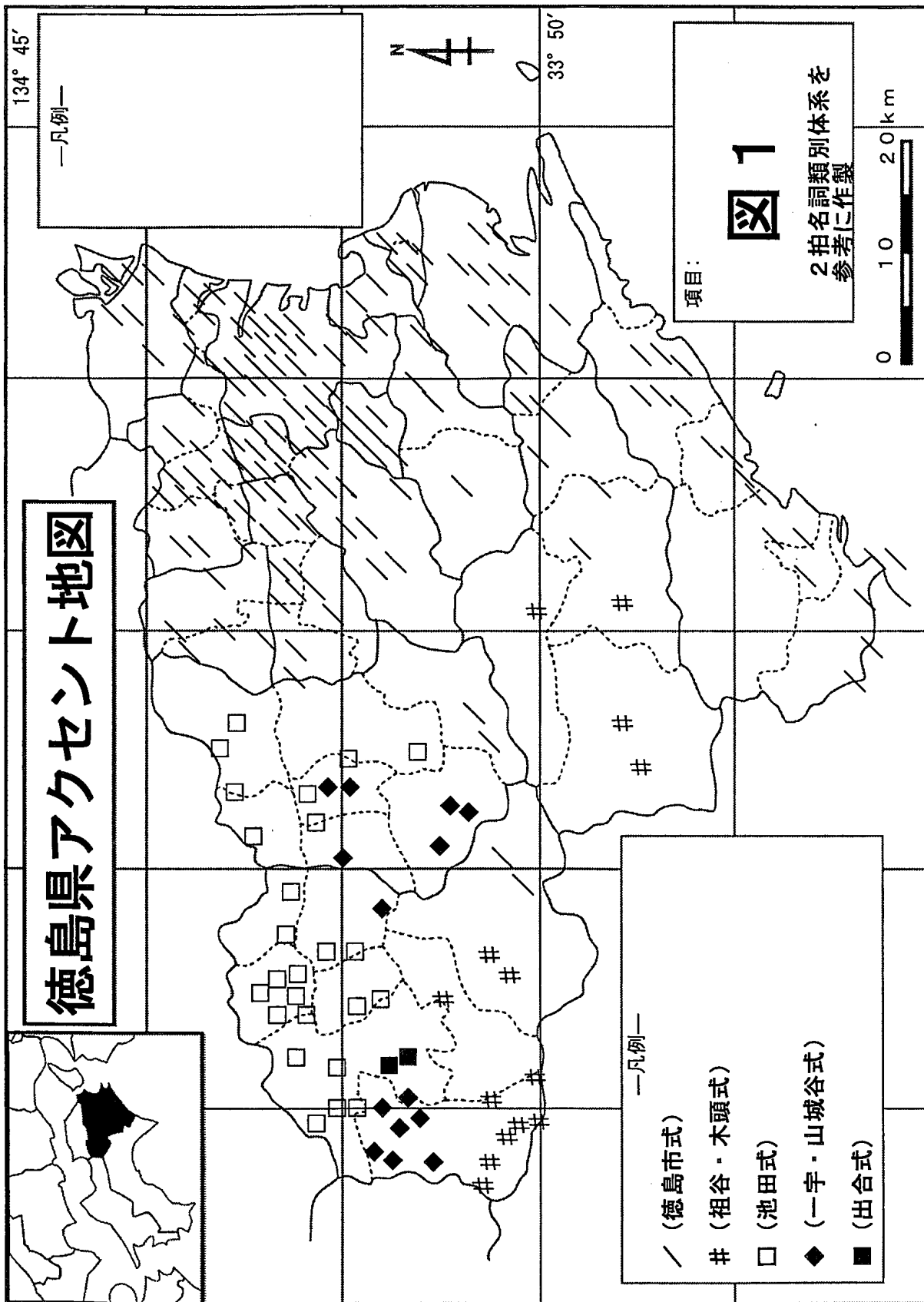


図1

表2 徳島市式アクセント体系表

<u>非上昇式</u>				
○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
○1○	○1○○	○1○○○	○1○○○○	○1○○○○○
	○○1○	○○1○○	○○1○○○	○○1○○○○
		○○○1○	○○○1○○	○○○1○○○
			○○○○1○	○○○○1○○
				○○○○○1○
<u>上昇式</u>				
○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
○○1	○○1○	○○1○○	○○1○○○	○○1○○○○
		○○○1○	○○○1○○	○○○1○○○
			○○○○1○	○○○○1○○
				○○○○○1○

徳島市式アクセントは、表2で示したように非上昇式、上昇式の2つの式と、核の位置で弁別されるアクセントである。非上昇式は、一般的には高起式（平進式）と呼ばれることが多く、上昇式とした方は従来、低起式と呼ばれてきたものである。「上昇式・非上昇式」という名称は、上野善道（1987）に従う。各式にこのような名称を用いる理由は、後述する池田式アクセントを説明する場合に便利で、この点については池田式アクセントのところで述べることにする。

さて、徳島市式アクセントの上昇式は、上野善道（1987）などで「龍神型」とされているものに似ており、上昇式の上昇位置が京阪などの場合と比較して早く、語頭から2拍目と3拍目の間にくる点で共通している。また、高知市アクセントの場合、徳島市・龍神村の場合よりも更に上昇位置が早く、1拍目と2拍目の間に上昇位置があり、このタイプは和歌山県田辺市の場合と同じである。いずれの場合にも、体系的には京都など中央式のアクセントと同じであるが、上昇式に所属する語の場合には音調型が以下のように異なるという、音声レベルでの違いがある。実際の音調型を示すと以下のようなになる。

高知市（田辺市）	徳島市（龍神村）	京都市・大阪市
ス「ズメガ	スズ「メガ	スズメ「ガ
ハ「リガネガ	ハリ「ガネガ	ハリガネ「ガ

つまり、上昇の位置が高知と京都の間である。高知市型→徳島市型→京都市型の順に上昇位置が後退していったと考えられる。発音を楽にさせる方向への変化であろうとみられる。

ただし、徳島市内の場合、その他で同一個人の中でも上昇位置にゆれが認められ、規則的に2拍目と3拍目の間にくるとは限らない。この事情は龍神村でも同様であり、同じく高知市や田辺市においても、上昇位置が規則的に安定しているとは言いにくい状況にある。これら、中央式諸アクセントでは現在、京都・大阪の上昇式へ変化しつつある過渡的な状況だと言えないであろうか。

この点を詳しく言及した大和（1993）によると、阿南市宝田町のアクセントにおいて、常に第3拍から上昇しているわけではないことに注目し、音韻的には同一のアクセント型が異なる環境で異なった実現をしているのだとして、その音声的実現規則を次のように示している。

規則0：音韻レベルにおいて核の有無・位置及び式が決められているが、以下の規則はこの型を壊してはならない。

規則1：低起式語ならば、第3拍上昇型を持つ。

規則2：音節内で上昇している場合には、上昇拍を1拍後ろにずらす。

規則3：形態素境界の直前あるいは直後の連続する2拍の間で上昇している場合には、上昇拍を1拍後ろにずらす。

規則4：規則2と規則3の適用回数の最大限は2回である。

（大和1993による）

この規則は阿南市宝田町のみならず、徳島市および徳島県東部地域全般に適用されるものであろう。

2-3. 池田式アクセント

美馬・三好郡平野部には、讃岐式アクセントの一つとされるアクセントが分布しており、玉井（1965）でも、池田町、半田町のアクセントを丸亀式アクセントとしている。

先の徳島市に代表される県東部のアクセントは、徳川（1981）において2拍名詞の類別体系が大阪や京都と同じく（V）とされる1/2・3/4/5であり、第二次アクセントとされる。一方、池田式アクセントの二拍名詞の類別体系は（II）の1・3/2/4/5の第二次アクセントであり、これを、池田式アクセントと呼ぶことにする。

このアクセントは森（1989）に、「県西里分では、名詞、動詞の第1類に下降調平板型の傾向が強い。」とあるように、徳島市式アクセントとは異なり、非上昇式が下降式音調であると指摘されている。吉野川中流域の脇町・穴吹町から池田町にかけての非上昇式は一般的に森（1989）が述べているように下降調平板型であるという指摘が最近の論文では多くなっている。この下降は本来

の核による下降とは異なり、伊吹島のように下降式音調と高平ら音調(高進式)とが式の対立を示すことはない。池田あたりでも、実際にゆるやかな下降をしているように聞こえることがある。ただし、この下降が非上昇式本来の自然下降とどう区別されるかといった問題や、この下降式音調の分布が池田町を中心とする県西部のみに認められるものなのか、あるいはそれ以外の地域に認められるもののかなどといった問題を解決するのは容易なことではない。したがって、池田式アクセントにみられる式の対立も、伊吹島を除く香川県各地にみられるような「下降式と上昇式の対立」とは今のところ即断できないので、徳島市式アクセントも一括できるように「非上昇式と上昇式との対立」としておくことにする。非上昇式とするならば、平進式であろうと、下降式であろうと上昇することはないわけであるから、問題はない。

池田式アクセントの体系を、三好郡池田町白地、上邨カメノ氏(昭和2年生まれ)によって示す。まず、主な音調型は次のとおりである。

表3 池田式アクセントの音調型

A	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0		「タケ	「クルマ	「ニホンゴ	「オンドケイ	「イイマチガイ
1	「ハ」ガ	「オ」ト	「チ」カラ	「ア」カチャン	「レ」ストラ	「ソ」ンチョーサン
2						
3				「ハナミ」ズ	「アワジ」シマ	「キクニ」ンギョー
4					「セカイチ」ズ	「アメリカ」ジン
5						「バクハツジ」コ
B	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	キ「オ	イ「ト	ウサ「ギ	ハリ「ガネ	アリ「アワセ	フル「シンブン
1		サ「ル」	ク「ス」リ	ヨ「ワ」ムシ	オ「ツ」キサマ	ヒ「ト」カタマリ
2				シヤ「ク」シヨ	サカ「ア」ガリ	ガキ「ダ」イショー
3					ケイ「サツ」シヨ	オバケ「ヤ」シキ
4						ジ「ドーシャジ」コ

表4 池田式アクセント体系表

非上昇式

○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
○1○	○1○○	○1○○○	○1○○○○	○1○○○○○
		○○○1○	○○○1○○	○○○1○○○
			○○○○1○	○○○○1○○
				○○○○○1○

上昇式

○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
○○1	○○1○	○○1○○	○○1○○○	○○1○○○○
		○○○1○	○○○1○○	○○○1○○○
			○○○○1○	○○○○1○○
				○○○○○1○

体系は徳島市式アクセントとほぼ同じで、非上昇式、上昇式という2つの式の対立と、核の位置で区別されるアクセントである。ただ非上昇式において2拍目に核があるものが現れなかったが、形容詞などにはある。例えば「危ない(形容詞)」の場合にはHHLLとなる。

2-4. 祖谷・木頭式アクセント ー垂井式アクセントー

高知県境付近のアクセントについて、西祖谷山・東祖谷山・木頭の各村をひとまとめにして扱うのは若干問題があるかもしれないが、古くは生田早苗氏によって東祖谷山村と木頭村で調査・研究されており、これら2地域のアクセントを、「C型アクセント」としている。2拍名詞の類別体系は徳川(1981)において(ワ)とされる1・4/2・3/5の第三次アクセントであり、これは近畿周辺部に認められる「垂井式アクセント」の一種である。四国山地中央部一帯に認められ、県内の分布地域は森(1989)の分布図によると、山城町(旧三名村地域)から西祖谷山村、東祖谷山村の西部にかけて、また、那賀郡木頭村、木沢村西部、上那賀町西部にも広がる。今回の調査結果でもほぼこれまでの結果と同じである。

次に、その体系を西祖谷山村有瀬、梅岡米夫氏(昭和6年生まれ)によって示す。主な音調型は次のとおりである。

表5 西祖谷山村有瀬アクセントの音調型

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	カ「ガ	イ「ト	ス「ズメ	ニ「ホンゴ	サ「ツマイモ	イ「イマチガイ
1	「ヤ」ガ	「ウ」タ	「コ」コロ	「マ」ンゲツ	「レ」ストラ	「ソ」ンチョーサン
2		サ「ル」	ク「ス」リ	フ「リ」ソデ	オ「ツ」キサマ	オ「イ」ナリサン
3				シ「ヤク」シヨ	ア「ワジ」シマ	キ「クニ」ンギョー
4					セ「キユキ」キ	オ「バケヤ」シキ
5						ア「イアイガ」サ

このアクセント体系は先に述べた池田式や徳島市式とは異なり、式の対立がなく、核の有無とその位置によって区別されるものである。

上野善道 (1987) では、「垂井式アクセントは、下げ核の位置はそのままに、式の対立を失って成立したものである」とされ、上野和昭 (1994) でもこの説が採用されている。

表6 西祖谷山村有瀬のアクセント体系

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	○	○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
1	○ 1	○ 1○	○ 1○○	○ 1○○○	○ 1○○○○	○ 1○○○○○
2		○○ 1	○○ 1○	○○ 1○○	○○ 1○○○	○○ 1○○○○
3				○○○ 1○	○○○ 1○○	○○○ 1○○○
4					○○○○ 1○	○○○○ 1○○
5						○○○○○ 1○

2-5. 一字・山城谷式アクセント

美馬郡一字村とその周辺（一字村、貞光町端山、半田町八千代、三加茂町大藤）、そして三好郡山城町旧山城谷村地区、池田町川崎、大和川地区と、2ヶ所に分かれて分布している。このアクセントについては、森 (1958) の中で「一字・山城谷式アクセント」として初めて報告された。2拍名詞の類別体系は徳川 (1981) において (へ) とされる 1・3・5 / 2 / 4 の第三次アクセントであり、このタイプのアクセントは金田一 (1977) によれば、愛媛県宇摩郡川之江町（現在の川之江市）にも存在するとされるが、玉井 (1965) では 1・3 / 2 / 4 / 5 とされている。また、上野・仙波・森 (1991) には、1・3類と5類は必ずしも合流していないという見方がある。森 (1991) からこの点を具体的にみると、句頭位置では、1・3・5類は合流しているものの、句中では、

例えば、

1類 ナ「イハナ (鼻)

3類 ナ「イハラ (腹)

に対して、

5類 ナ「イ」サ「ル (猿)

といった対立があるという。もし、このような差があるとすれば、垂井式アクセントでは失われている句中での上昇性（句中では低く付くという性質）が保存されているわけであり、式の対立が全くないとは言い切れないことになる。この点については後述することにした。

次に、その体系を山城町瀬貝、平岡政一氏（昭和7年生）によって示す。主な音調型は次のとおりである。

表7 山城町瀬貝アクセントの音調型

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	メ「ガ	イ「ト	ウ「サギ	ニ「ホンゴ	サ「ツマイモ	オ「コノミヤキ
1	「チ」ガ	「ウ」タ	「コ」コロ	フ「リ」ソデ	「レ」ストラン	「ソ」ンチョーサン
2		サ「ル」	ク「ス」リ	エ「ニ」ツキ	オ「ツ」キサマ	ウ「タ」ガッセン
3				ア「オゾ」ラ	ア「カト」ンボ	キ「クニ」ンギョー
4					セ「キユキ」キ	オ「バケヤ」シキ
5						ア「イアイガ」サ

表8 一字・山城谷アクセント体系表

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	○	○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
1	○ 1	○ 1○	○ 1○○	○ 1○○○	○ 1○○○○	○ 1○○○○○
2		○○ 1	○○ 1○	○○ 1○○	○○ 1○○○	○○ 1○○○○
3				○○○ 1○	○○○ 1○○	○○○ 1○○○
4					○○○○ 1○	○○○○ 1○○
5						○○○○○ 1○

このアクセントも垂井式アクセントの場合と同じように式の対立がなく、核の有無とその位置だけで弁別されるものである。

2-6. 出合式アクセント

出合式アクセントは、三好郡池田町出合小学校校区という非常に限られた狭い地域でみられるアクセントである。1957年、森重幸氏の全県調査によって発見され、森（1958）で発表された。2拍名詞の類別体系は徳川（1981）におい

て(ヌ)とされる1・2・3/4/5の第三次アクセントである。金田一(1977)でも、日本でここだけという珍しいアクセントとして紹介されている。ただし、上野和昭・森(1992)によると、2拍名詞の類別体系に対して、大和(1990)が異論を出していることを紹介している。大和(1990)は1・2・3の各類は、頭高型で統合しているというこれまでの見解に対し、1・3類は池田町と同じ平板型(乃至下降型)が聞かれることがあることから、出合アクセントの場合、池田型アクセントに近いというもので、1・3/2ではないかとみている。未報告であるが、岸江が1988年に老年層話者4名を対象にして出合で行った調査でも、1・3類に平板型が現れたことが気になりとなっていた。この点を検証するため、上野和昭・森(1992)は出合での多人数調査を実施して1類と3類の音調型を詳しく調べ結果、1類3類ともに約90%の比率で頭高型(●○○)であったと報告している。恐らくこれまで森(1958)などによって考えられたように、出合式アクセントは徳島市型アクセントや高知市アクセントからの変化ではなく、池田式アクセントからの変化であると思われるから、池田と同様、出合の1・3類が平板型であったとしても、古い形式が残存している(または平板型から頭高型に移行しつつある過渡的段階)とみることもできる。或いは出合が池田町内にあることから、池田旧市街の影響を受けて、頭高型に平板化が生じつつあると考えられないこともない。

出合アクセントの体系を池田町松尾字大申(出合校区)西川シナエ氏(大正7年生)によって示す。主な音調型は次のとおりである。

表9 出合式アクセントの音調型

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	キ「ガ	イ「ト	ネ「ズミ	ニ「ホンゴ	ウ「タガッセン	オ「コノミヤキ
1	「チ」ガ	「ウ」タ	「コ」コロ	「フ」リソデ	「レ」ストラン	「ミ」ソラーメン
2		サ「ル」	ク「ス」リ	ア「カ」チャン	オ「ツ」キサマ	ア「カ」トンボ
3				シ「ヤク」ショ	ロ「クオ」ンキ	オ「イナ」リサン
4						タ「ライマ」ワシ

このアクセントも垂井式アクセントや一字・山城谷式アクセントの場合と同じく、式の対立がなく核の有無とその位置だけで区別されるものであろう。仮に1・3類に平板型が実現されようとも、4類との式の対立は認められない。また、3拍語以上の型においても池田式のように式対立はない。このような点からこれら垂井式、一字・山城谷式、出合式アクセントは、体系的に東京式アクセントと同一のものであるといえる。つまり、これら3種のアクセントは、

それぞれの語の所属が違うだけで、出現する型は同じなのである。

表10 出合式アクセント体系

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
0	○	○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
1	○1	○1○	○1○○	○1○○○	○1○○○○	○1○○○○○
2		○○1	○○1○	○○1○○	○○1○○○	○○1○○○○
3				○○○1○	○○○1○○	○○○1○○○
4						○○○○1○○

2-7. アクセントの式対立の有無と消失

これまでみてきたアクセントは、式の対立のあるものとなないものとの2つの体系に分けられるが、対立がすでに消失しているにもかかわらず、その対立があったことを示す痕跡を残すものもある。式の対立の有無を示した分布図を次ページに示した。平野部の徳島市式アクセントや、池田式アクセントには式の対立があるものの、山間部の諸方言アクセントでは式の対立が既に消失にしたものと、その痕跡を残すものがあるが、この点に関する詳しい報告は山間部での更なる精査を行い、報告したい。

中央式アクセントでは、例えば、非上昇無核型の語同士が接続する場合と非上昇無核の語に上昇式の語が接続する場合とでは、明らかな差が現れる。

- 1) 「コノサカナ
- 2) 「コノ」スズ「メ

木頭村を詳しく調査した上野和昭（1994a）によれば、木頭村では、うしろへ高平に続く「この」などをつけた場合、句中での上昇性（低接性）が今なお残るとしている。同様に上野和昭（1992）によると、出合のアクセントについても同様のことが指摘されている。また、一字・山城谷のアクセントについても森重幸（1991）などで同趣の指摘がある。

そこで、実際に今回調査分から例をいくつかあげてみる。但し、一字、山城谷、出合などでは「この」がHLとなり、「この」付きだけでは判定が困難である。そこで、上昇式+上昇式の場合も含めてみることにしたい。

まず、式の対立がある徳島市式アクセントや池田式アクセントの地域の場合をみると、次のように上昇式の語は必ず低くつくという性質（低接性）を持っている。これは先の中央式アクセントの場合と同じである。ただ、一字以下の地域では句中でこのような対立が認められるものの、句頭位置においてはなんら区別されることはない。

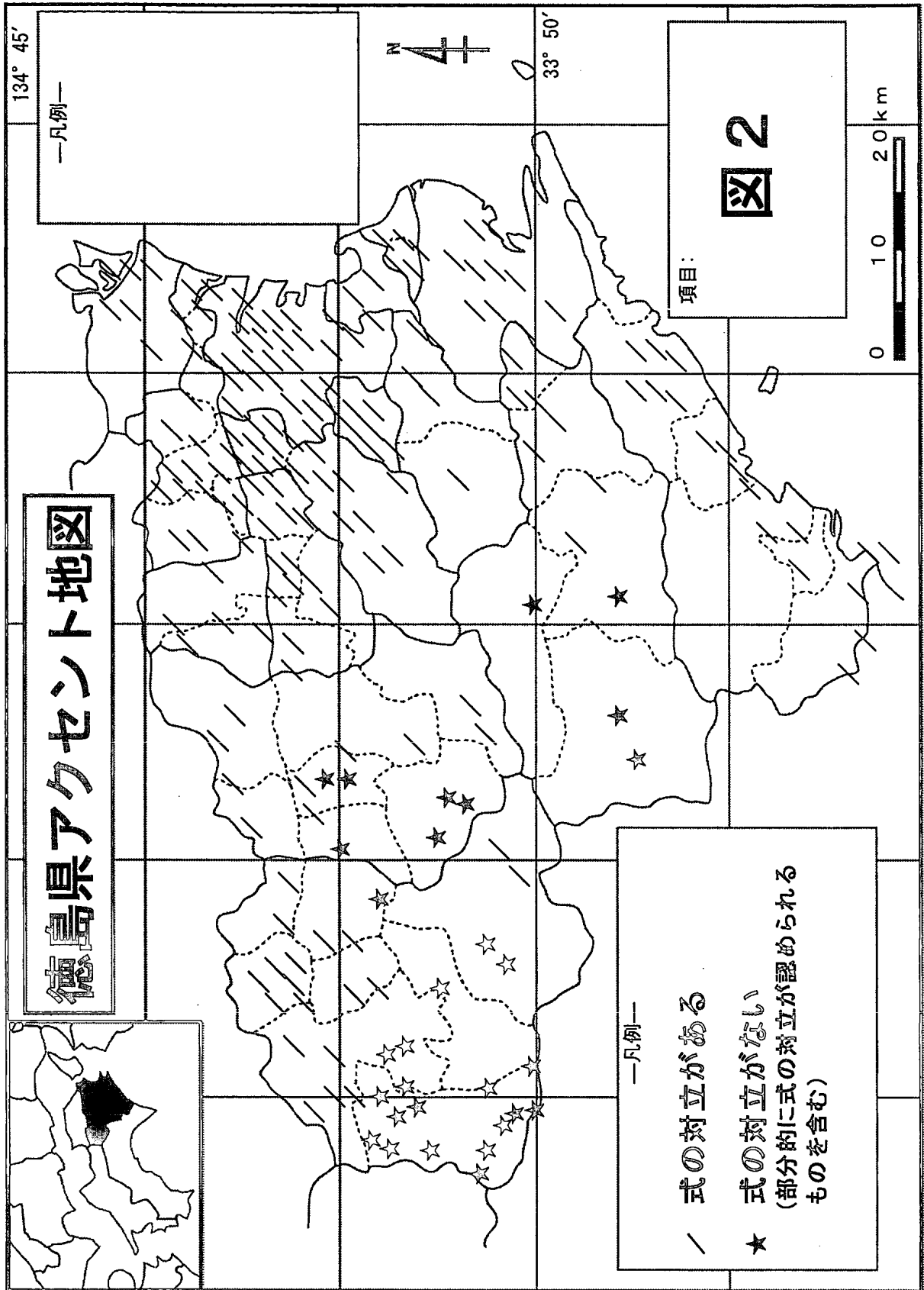


図2

	徳島市南田宮	鴨島町森藤	三加茂町加茂
「この糸が」	HLLH	HLLH	HLLH
「船がでる」	LLHL	LLHL	LLHL

祖谷などの式の対立がない地域の場合を見てみる。但し、池田町出合、一字村河内、山城町瀬貝については「この」の音調がHLのため「この」付きでは判断できない。

	西祖谷山村有瀬	木頭村折宇	木沢村坂州
「この糸が」	LHHH	LHHH	LHHH
「船がでる」	LHHH	LHLH	LHLL

	池田町出合	西祖谷山村下名	一字村河内	山城町瀬貝
「この糸が」		LLLH		
「船がでる」	LLHL	LHLH	LLHL	LHLH

これらを見ると、上段の「この」付きではすべて上昇性が失われているが、「船がでる」の場合には、西祖谷山村有瀬以外は上昇性を残している。また、下段の地点も、上昇性を残している。ただ、「この」と「糸」との連結の度合いが弱くなると、句の発音ではなくなるのでその見極めは難しい。しかし、このケースの調査語全体をみた場合、低くつく傾向が認められた。

つまり、この地域のアクセントは、非上昇式に合流していった他の垂井式アクセントとは異なり上昇式に合流したために、式の対立を失いながらも句の中に上昇性が残っているといえる。しかし、「有標項と無標項の対立が失われる（中和する）場合には、無標項の方に合流するというのが世界の諸言語に見られる普遍的傾向（上野善道1987）」だとされるのに、なぜ無標である非上昇式（自然で楽な発音）に合流するのではなく、有標のほうに合流したのかは難しい問題である。

3. アクセント地図でみる徳島県内のアクセント分布

ここからは、拙稿の終わりに掲載したアクセント地図を参考に徳島県内のアクセント分布について考える。3拍語までは類別に、それ以上の語についても似た分布をしている語をまとめて考察する。また、森重幸（1989）の昭和32年調査分の分布図とも比較してみたい（以後、森分布図と呼ぶ）。当時の調査は、

昭和17年生まれのものが主対象であり（平成11年現在58歳前後）、当時の中老年層の協力も得ているので、十分比較し得るものだと思われる。また森重幸（1989）で下降調とされているものはここで記す高平調と区別せずに扱うことにする。

3-1. 2拍名詞

①第1類（竹・国・牛・口・酒）→図4「竹」、図5「国」参照

2拍名詞は主に助詞付きで考察していくことにする。

この類ではHHH型がもっとも広く分布しており、東祖谷山村西山まで及んでいる。森分布図には、HHH型とLHH型の両方の分布を認められる。東祖谷山村の東部は、意外にも剣山を隔てた木屋平村と同様にHHH型であり、徳島市式アクセントの勢力範囲であるようである。

東祖谷山村東部を除く祖谷地域および木頭周辺にはLHH型が広がっている。これはHHH型から語頭低下を起こした結果生じたと考えられ、第4類と合流している。また、山城谷地区や一字村周辺のLHL型が分布しているが、これは池田式から語頭低下と、下降式の核化の両方を起こした結果であろう。HLL型は、池田町出合のみで見られる型であり、これも池田式から核を生じた結果、HHL型となり、この型がHLLと紛らわしく、さらにこれまでにHHLという型が無いために、HLL型に類推して生じたと考えられる。これらの変化は、3拍以上の語についても共通していえる。

また、西祖谷山村小祖谷周辺ではLLH型になるが、これは金田一（1974）のこの部分の説明を適用できるだろう。

元来高い音を発することは、低い音を発するよりも声帯をよけい振動させなければならず、労力をよけい使うから、とかく嫌われる。その上、○○○という音調は、第2拍を第1拍とちがう高さで発音するというということでもう一つ抵抗がある。○○●調ならば、第1拍と同じ高さで第2拍を発音していい。こういう二つの望ましくないことを除去するために———そうして、ほかに、○○●調の型が元来なくて、他の型と混同する恐れがないという消極的な理由があって、○●●型が○○●型に変化しようとするものと思われる。

（※●が高拍、○が低拍）

つまり、この地域ももとは村内の他の地域と同じようにLHH型であった

が、このような理由から現在はLLH型になっていると考えられる。第4類も同じくLLH型であり、徳島市型から第1類が第4類に合流したとも考えられるが、LHH型に発音する場合もあり、また、徳島市式アクセントと隔絶していることなどを考えると、第1類が第4類のLHH型に合流した祖谷地方一般のアクセントから変化したものとするのが妥当であろう。森(1962)にも同様の指摘がある。また、森(1958・1962・1982)では木頭村北川地区にもこの音調があるとされるが、今回の調査では未調査になっている。上野和昭(1994a)の調査では、その音調が特に聞かれなかったとされており、その実態は不明である。ただこれは音声的な差異であって、大きな問題にはならないだろう。この類では、基本的に森分布図と大差はない。

②第2類(歌、音、雪、冬、夏、人)→図6「歌」、図7「音」参照

第2類の語は県内全域において、ほぼHLL型で安定している。「人」のみ、山城谷地区、一字村等で例外的にLHL型になっている。森(1958)でも一字周辺にあることを指摘しているが、山城谷地区については触れられていない。両地域に共通する現象として興味深い。

③第3類(垢、網、泡、腕、鬼、貝、神、靴、雲、塩、炭、谷、月、毒、花、浜、孫、店、夢、綿、足、穴、家、犬、色、馬、親、髪、皮、肝、熊、米、舌、土、墓、腹、豆、耳、山、指)→図8「腕」、図9「鬼」参照

第3類は、吉野川流域においてHLLの徳島市型とHHHの池田型との対立があることが分かっているため、調査語彙を多くしている。

池田町から脇町、穴吹町にかけてはHHH型である。また徳島市から南部全域、木頭、祖谷周辺にかけて広い範囲にHLL型が広がっている。

また、一字村周辺と山城谷地区にはLHL型が、池田町出合地区にはHLL型が分布し、それぞれの第1類と同じ過程を辿ったと思われる。その結果、LHL型になった一字、山城谷では1・3・5類の統合を起し、HLL型になった出合では記述したように1・2・3類の統合を起している。

個別的なものとしては、「穴」「皮」が、平野部一帯で第4類と同じ動きをしていることが挙げられる。

④第4類(板・跡・外・糸・松・海・数・針・稲・肩・船・箸・錐・咽喉・屋根・種・杖)→図10「板」、図11「跡」参照

県内にはLLH型とLHH型の2種類が分布している。LLH型は平野部と小祖谷地区に、LHH型は山間部に分布している。また、LLL型は、LLH型の次に非上昇式の語が来た場合に、上昇位置が後ろへ送られて生じたものである。森(1958)では、三名(山城町南部)・三縄(池田町南部)・山城谷(山城

町北部) などでは LLH 型と LHH 型が混在しているとしながら LLH 型としてまとめられている。実際にこの地方のアクセントでは、その両方が同一個人で出現しているが、今回の調査では、LHH 型の方が多い傾向にあった。

また、森(1989)に「海」だけ取り出して分布図が作られているが、その分布は今回のアクセント地図と全く同じで、川島町以西の地域と、山城町三名地区で LHL 型になるという独自の分布をしている。

⑤第5類(汗・猿・雨・蛇・朝・蜘蛛・声・秋)→図12「雨」、図13「秋」参照

この類は、全県的に LHL 型で安定している。但し例外的なものがいくつかあり、「声」「蜘蛛」が垂井式アクセントの地域でそろって HLL 型になっている。このことについては生田(1951)に、「声」「窓」がこういう型が現れることが示されており、最近起きた変化ではなさそうである。1拍名詞第3類「絵」の助詞つきが祖谷地方から高知県山間部にかけてのみ HL 型になっているのと何か関係があるだろうか。その他、「蛇」についても、西部山間部では第4類と同じ動きをしている。

また、今回「蜘蛛」の分布図には HLL 型の分布が県内全域に多数見られるが、これは「雲」と取り違えて発音している可能性が高い。

県西山間部において特に複雑な分布をしていることが一目で分かる。2拍名詞については、全体的に森分布図とほとんど変わらない結果になった。

3-2. 1拍名詞

1拍名詞は、助詞付きのみ地図化を行ったが、2拍名詞の場合と同じくほぼ森分布図に対応するような結果となった。

①第1類(血が・蚊が・気が・毛が)→図14「血」、図15「蚊」参照

1拍名詞では第1類が最もはっきりとした分布を見せている。祖谷・木頭周辺で LH 型となっているのは、先で延べた2拍名詞第1類などの場合と同じように、徳島市型の HH 型から語頭低下を起こして生じたものだと考えられる。

また、池田式アクセントの地域は HL 型であって、これは香川県西部と同じである。出合、山城谷、一字など池田式から変化したと思われる地域でも同じく HL 型で安定している。

徳島市型の HH 型が西部に張り出している様子も多少みられ、脇町・穴吹あたりは語によってゆれがみられる。

②第2類(日が・矢が・葉が)→図16「日」、図17「葉」参照

第2類の語は、多少の例外を除くと県下全域 HL 型で安定している。

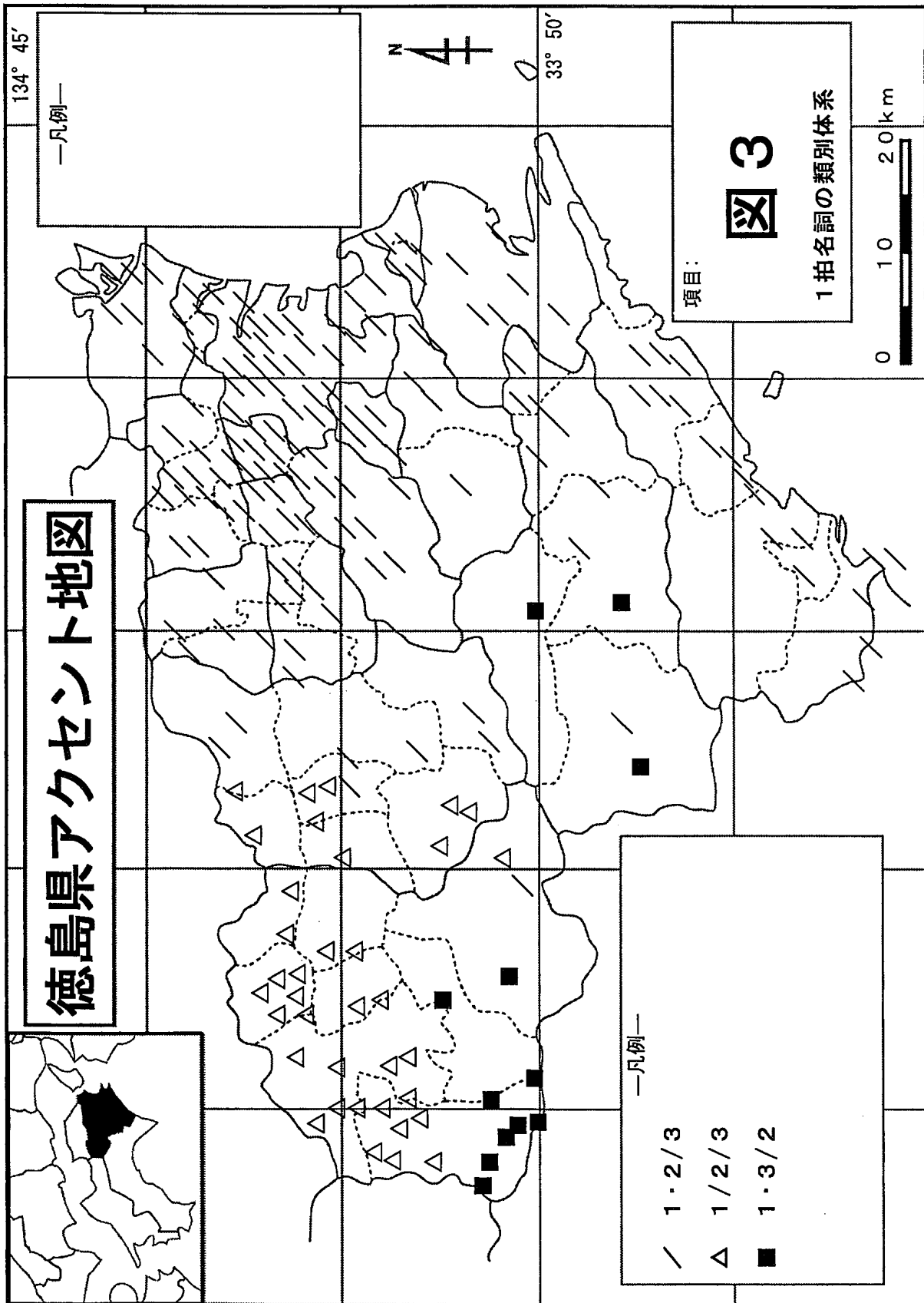


図3

③第3類 (目が・絵を・火を・木を・湯が・田を) → 図18「火」、図19「木」
参照

県下全域に LH 型乃至 LL 型が広がっている。LL 型は、LLH 型の次に非上昇式の語が来た場合に、上昇位置が後ろへ送られたものである。

「絵を」の場合のみ、祖谷周辺で HL 型が見られる。土居 (1956) に、高知県長岡郡大豊村落合 (現在の大豊町落合、徳島県境から約5キロメートル) においても、「絵が」の場合のみ例外的に HL 型となるという記述があり、この周辺一般に見られる現象であろう。2拍名詞第5類の「声」などと共に興味深い。

1拍名詞の類別体系の分布を図3として示す。第1類の語がどの形をとるかで、1拍名詞類別体系の分布が決まるといえよう。

3-3. 3拍名詞

3拍名詞についても、基本的には類別ごとに見ていくことにする。但し、類別がはっきりしないものについては分布状況の似ているところに含めることにした。

また、森分布図では名詞については3拍第2類までしか示されていないため、それ以降は比較が出来ないことを先に断っておく。なお、(H)(L)などは助詞付きの場合である。

①第1類 (車・魚・氷) → 図20「車」、図21「氷」参照

3拍名詞では2拍名詞とは異なり、各語類があまりまとまった分布を見せていない。第1類では、主に HHH(H)、LHH(H)、LHL(L) の3種類の型の分布パターンである。主として、徳島市型アクセント地域では HHH(H) 型、木頭村・西祖谷山村など山間部では LHH(H)、一字村・山城町では LHL(L) 型となることが多く、2拍名詞第1類の場合と通じるところがある。

「車」と「魚」は似たような分布を示しており、森分布図で似たような分布を示すのは、「飾、霞、煙、羊、都」であった。

「氷」は、徳島県を二分して LHH(H) 型が西に、HHH(H) 型が東に分布しており、東西型ともいえる分布パターンを示している。森分布図で似たような分布を示すものとして、「筏、鯛、着物、机、柳」があげられている。

②第2類 (二つ・二人・毛抜き・女) → 図22「二つ」、図23「毛抜き」参照

「二つ」と「二人」について森分布図は、LHL(L) 型が県内では一般的であるが県西山分において LHH(H) 型に変化しつつある、という報告を行っている。森氏は祖谷地方にもその傾向があるとしているが、今回の調査では、一字・山城谷アクセントの地域にだけ LHH(H) 型が出現した。これらの地域で変化

が進んでいるようである。

「毛抜き」は吉野川流域に HHH(H)型が散在しているが、池田式アクセントとその系統の地域は HLL(L)型が、徳島市式アクセントの地域は HHL(L)型が主である。垂井式アクセント地域の LHL(L)型は、HHL(L)型からの変化だと考えられる。

「女」は、第1類の「氷」と同様に東西の対立型分布を示し、西部に HLL(L)型、東部に HHL(L)型が広がりを見せている。2拍名詞第3類のアクセント分布では HLL型と HHH型とが脇町・穴吹町を境にして、東西で対立しているが、この場合は脇町・穴吹辺りが境になっておらず、北岸は上板まで、南岸は徳島市内まで西の HLL(L)型が進出している。HHL(L)型と HLL(L)型が似た音調であることや、他の類に HLL型が多いことも関係しているだろうか。

③第3類（岬・小麦・南・力）→図24「小麦」、図25「力」参照

まず「岬」であるが、県北部に HHH(H)型が、県南部に HLL(L)型が広がっている。この分布からみて、県北部にも HLL(L)型が散見されることから、もともとは県南型の HLL(L)型が県北部にも広がっていたところに、新たに HHH(H)型が広がったと見るができるだろうか。また、木頭方面は HLL(L)型であるが、祖谷、山城付近は LHH(H)型が主で、特殊な分布をしている。

「小麦」は県内の分布が3分しているが、重要なのは県北部の HLL(L)型と県南部の HHL(L)型の対立である。

小松島以南に広がる HHL(L)型が古い型であって、南北の対立状況は3拍形容詞と良く似ている。この型は東祖谷山村の東部にも見られる。その2つの対立の中で、さらに新しく HHH(H)型が徳島市を中心にして出現しているようである。

木頭、祖谷の LHL(L)型は HHL(L)型からの変化であろう。三好、井川、池田に広がる LHL(L)型は讃岐からの影響と考えるべきであろうか。

南北の対立は「南」にもみられ、ほとんどの地域の分布状況は2拍名詞第1類助詞つきと似ているが、海部郡のみ HHL(L)型が分布している点で独特な分布である。

「力」は、全県的に HLL(L)型が広がり、山間部で LHL(L)型が散見される。

④第4類（言葉・東・男・宝）→図26「男」、図27「宝」参照

この類の語は、池田式アクセントと徳島市式アクセントとで対立のあるもので、これらは2拍名詞の場合の分布とは異なり、すべて池田式アクセントが吉野川下流域へ進出している。

まず、「言葉・東」であるが、これは「言葉」の場合、祖谷地方にまで池田

型の HLL(L)型が広がっていることを除くと分布が良く似ており、双方とも阿波郡・麻植郡にまで池田型の HLL(L)型が完全に広がっている。但し、「男」の分布をみると、HHL(L)型の周辺に HLL(L)型が見られ、池田型である HHH(H)型が広がっていないことから、「言葉・東」の場合でも池田型の影響のみならず、HHL(L)型から独自に変化したとも考えられる。ただ、「男」の分布と非常に似ている「宝」の場合は、徳島市式アの HHL(L)型地域まで池田式アの HHH(H)型が北岸を主にして食い込んでおり、池田式アは3拍名詞第4類については東部地域に確実に及んでいるといえるだろう。

⑤第5類（あわび・朝日・心・油・枕）→図28「朝日」、図29「枕」参照

この類は2拍名詞第2類のように、県内で地域差がほとんどないものである。その中で、「油」は、2類の「岬」と似た分布を、「枕」はLHH(H)型の分布に関して第1類の「氷」と似ている。美馬郡から三野、三好町まで HHH(H)型がみられるため、それから語頭低下を起こしたのではないかと思われるが、一字村ではLHL(L)型となっているのに対し、山城谷地区ではそれがみられないのが気になるところである。

⑥第6類（兎・雀・鼠・狐）→図30「兎」、図31「雀」参照

この類の分布は徳島市型アクセント地域でLLH(H)である。一方、高知県境山間部においては、上昇位置が早いLHH(H)型が認められる。しかし、山城谷地区でははっきりと2拍目から上昇しているというわけでもなく、段階的に上昇することが多いようである。上昇位置が少しずつ後退しようとする傾向があるといえよう。

⑦第7類（緑・鯨・薬・後ろ・苺）→図32「苺」、図33「薬」参照

この類はいずれの語も全県下でLHL(L)型で地域差が認められない。ただし、「苺」の場合に鴨島町を中心とした地域に限定してLLH(H)型が現れている。

以上、3拍名詞に関しては、全般的に2拍名詞の場合の分布によく対応する結果が得られた。しかし、3拍第4類「言葉・東など」の池田型が徳島市式アクセント地域へ進出している様子が見られるように、すべてが2拍名詞と同じ分布傾向を示すというわけではない。

3-4. 4拍名詞

県内での分布上での特徴がみられる語アクセントについて取り上げる。なお、語の分類に関しては、4拍名詞において分布が似通っているものを便宜的にまとめた。

①「焼酎・足跡・青空・雑巾・瓢箪・栓抜き」の類→図34「焼酎」、図35「青空」参照

これらの分布は吉野川流域において3拍名詞第4類「宝」などの分布とほぼ等しく、いずれも上板・石井辺りまで池田型が広がっている。吉野川流域で見ると、池田町ではHHHH(H)型であるのに対して、徳島市域ではHLL(L)型～HHHL(L)型であるが、HHHH(H)型が吉野川北岸に沿って徳島市市域近くにまで広がる分布をみせている。徳島型と池田型の対立が3拍名詞第4類の分布と酷似している。

②「振袖・胃袋・折り紙」の類 →図36「振袖」、図37「胃袋」参照

池田型のHLLL(L)型と徳島市型のHHLL(L)～HHHL(L)で対立しているが、徳島市域にまで池田型が入り込んでいるケースである。①の場合と分布の上で共通するところがあるが、対立する音調型が異なる。吉野川中流域の脇町・穴吹町付近で2拍名詞第3類がHHH型とHLL型とが対立するのは夙に知られているが、このケースのように、①のケース同様、池田型HLLL(L)型が脇町・穴吹町を越えて徳島市にまでその分布が及んでいる点は注目してよいと思われる。

③「駅弁・カツ丼・お菓子屋・わがまま・ニンジン・針金」の類→図38「駅弁」、図39「ニンジン」参照

上昇式無核型の音調のヴァリエーションである。徳島市を中心とした県東部では断然LLHH(H)型が多く、高知県境域に分布するLHHH(H)型と対立する。

ただし、徳島市域にはLLHH(H)型以外に中央式アクセントと同じLLLL(H)型も目立っている。LLLL(H)型の場合は、助詞なしではLLLH型となる。上昇位置が古形ほど後れるというのが一般的な見方で、徳島市内でもLLLL(H)型への変化が若年層に起きている。

④「日本語・蒲鉾・水玉」の類→図40「日本語」、図41「蒲鉾」参照

非上昇式無核型に属する音調を有するものである。県内のかなり広い地域にHHHH(H)型が分布するが、木頭村など高知県境付近ではこれに対して、LHHH(H)型となっている。この場合も語頭低下によるものとみる。「蒲鉾」の場合に一字村ではLHLL型になっているが、山城谷地区ではLHHH型である。長い単語になると、一字村と山城谷地区とで等しくない分布がみられることがある。変化の進度の違いであろうか。

⑤「飴玉・サイコロ」の類→図42「飴玉」、図43「サイコロ」参照

中央式アクセントでは非上昇無核型という点で、④と同じであるが、音調型のヴァリエーションが④とは異なる。徳島市域を中心に県内の広い地域で

HHHH(H)型、池田町周辺で LLHH(H)型の対立が見られる。④と似ているが、池田の場合は上昇式無核となっている。一字・山城谷地区では LHHH(H)型となっており、④の場合と同様、語頭低下によるものとみられる。

⑥「満月・エンジン・挨拶・歯ブラシ」の類→図44「満月」参照

全県下に HLLL(L)型が分布しており、地域差が認められない。2拍名詞第2類、3拍名詞第5類などと同じで、いずれも頭高型のケースである。

⑦「三角・弱虫」の類 →図45「三角」参照

この場合も県下での分布対立が認められず、LHLL(L)型で差がない。2拍名詞第5類、3拍名詞第7類の場合と同じ、中高型である。⑥のケースと同様、注意しておくべき語類である。

3-5. 2拍動詞

(売る・買う・着る・積む・煮る・する・居る)の類→図46「煮る」参照

これらは、第3類である「居る」を除くとすべて非上昇無核型で、1拍名詞第1類の分布と酷似している。ただ異なる点は、池田式アクセント地域に徳島型の HH 型が混在していることである。上昇式無核に当たる語のアクセント地図を欠くが、西祖谷山村・木頭村など高知県境地域では「着る」と「切る」がともに LH 型に合流している。

3-6. 3拍動詞

①第1類 (挙げる・歌う・囲む・着せる・並ぶ・負ける・遊ぶ・昇る)→図47「負ける」参照

中央式で非上昇無核型に属するものである。徳島市型アクセント地域では HHH 型で安定しているが、徳島県西部域では複雑な分布を見せている。西祖谷山村・木頭村など高知県境地域では HHH 型の語頭低下によると思われる LHH 型、一字村と山城谷地区に LHL 型（音調型は更に穴吹町・貞光町の一部にもある）、池田町出合や穴吹町の一部に HLL 型がみられる。

なお、「遊ぶ」と「昇る」については池田式・徳島市式アクセントの両地域で LLH 型になっているが、高知県境で LHH 型、一字村と山城谷地区ではやはり LHL 型が目立っている。

②第2類 (受ける・降りる・逃げる〔一段〕／余る・思う・帰る・困る・太る〔五段])→図48「受ける」、図49「思う」参照

中央式アクセントの代表である京阪アクセントでは、一段活用の場合が LLH 型、五段活用が HHH 型となるのが一般的であるが、徳島県内ではほぼ全域で

このような区別はない。一段・五段ともに、池田式アクセントの地域では HHH 型、一字・山城谷アクセントの地域で LHL 型、その他、徳島市型アクセント地域から西祖谷山村・木頭村など高知県境地域では HLL 型が分布している。

この徳島型の HLL 型は、近世中期頃に京都で使われていた形を残しているが、現在、一段活用のもは LLH 型に、五段活用のもの HHH 型に変化しつつある状況である。これは大阪などのアクセントが影響した可能性が強いように思われる。上野・仙波 (1993) によれば、その変化は一段活用のほうに早いという。その様子が今回の調査結果 (アクセント地図参照) にもあらわれており、徳島市式アクセント地域において五段活用のもは HLL 型が顕著なのに対して、一段活用のものに LLH 型の出現が多く認められる。

③第3類 (歩く)→図50「歩く」参照

LLH 型が県下全域に広く分布している。また祖谷、木頭周辺に LHH 型、一字村、山城谷地域には LHL 型がみられる。この型は穴吹町の口山、古宮などその周辺にも認められ、その状況は森分布図でも見ることができる。一字村・山城谷地域はすべての動詞が LHL 型に一型化する傾向がある。

3-7. 4拍動詞

4拍動詞の徳島市内で起こっている変化については上野和昭 (1994b) に詳しいが、ここでは分布のみ考える。

①「与える・疑う・遅れる・固まる・働く・泣かれる」の類→図51「疑う」参照

県西部を除く徳島県の広い地域で HHHH 型が聞かれる。高知県境の祖谷、木頭周辺に LHHH 型、一字村、山城谷地域には LHLL 型が認められる。2拍名詞第1類と分布領域などが酷似している。

②「断る・へこます」の類→図52「へこます」参照

①の場合と各音調型や分布が似ているが、祖谷地方に HLLL 型が認められるという点で特色がある。

③「調べる・喜ぶ」の類→図53「喜ぶ」参照

徳島市式アクセントでは HLLL 型であるが、池田式で HHHH 型となる。吉野川流域では HHHH 型が北岸域に沿って徳島市近郊にまで張り出している。4拍名詞にもこのような現象がみられることはすでに述べた。

HLLL 型を取り囲むようにして HHLL 型が広がっている。「喜ぶ」のほうに変化が早く、HHLL 型は鳴門市と海部郡に残るのみである。祖谷や木頭周辺にも HLLL 型がみられる。

3-8. 2拍形容詞

「良い」は LH 型が、「酸い・濃い」は HL 型が県下全域に広がっている。森分布図では「良い」の場合、山間部で HL 型が聞かれると指摘しているが、今回の調査では、まとまった分布はみられなかった。

3-9. 3拍形容詞

(赤い・厚い・薄い [第1類] / 熱い・白い [第2類]) → 図54「赤い」、図55「白い」参照

県南部と県北部で対立する。県南に広くデータがあるのは「赤い」と「白い」のみなので、この2つで検討する。一般に北部ではいずれも HLL 型に合流している。これに対して、県南では HHL 型が顕著である。県内各地で一型化しているが、注目すべきは阿南市内である。第1類が HHL 型、第2類が HLL 型と分かれており、二型が保持されている。

4. おわりに

以上、徳島県下における諸方言アクセント体系と、地理的観点から徳島県アクセント地図を参考に県下のアクセント分布について触れた。県下アクセント地図はデータベースソフトのファイルメーカー PRO を応用して約470枚が石田祐子 (1999) で作製されている。

今後、音声データを活用するために、「徳島県音声地図」の作製を行う予定である。

参考文献

- 生田早苗 (1951) 「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」『国語アクセント論叢』法政大学出版局
- 石田祐子 (1999) 『徳島県アクセントの研究』徳島大学総合科学部提出卒業論文
- 上野和昭・仙波光明・森重幸 (1991) 「徳島県三好郡山城谷アクセントの動向—二拍名詞を中心に—」『徳島大学国語国文学4』
- 上野和昭・森重幸 (1992) 「徳島県出合アクセントについて」『徳島大学総合科学部紀要5』徳島大学総合科学部
- 上野和昭・仙波光明 (1993) 「徳島市における三拍動詞アクセントの変化の実

態」『徳島大学国語国文学6』

- 上野和昭 (1994a) 「徳島県木頭村の方言アクセントについて」『言語文化研究』
1 徳島大学総合科学部
- 上野和昭 (1994b) 「徳島市における四拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島
大学国語国文学7』
- 上野和昭 (1997) 『徳島県のことば』日本のことばシリーズ36 明治書院
- 上野善道 (1985) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (1)」『日本学士
院紀要』40-3
- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2)」『日本学士
院紀要』42-1
- 上野善道 (1988) 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論'88』
- 加藤信昭 (1968) 「境界地帯におけるアクセントの問題—吉野川流域を中心と
して—」日本方言研究会第6回発表原稿集
- 金沢治 (1968) 「祖谷地方の方言」祖谷総合調査6
- 金沢浩生・仙波光明・岸江信介・村中淑子・野田和子・石田祐子 (1999) 「穴
吹町の方言」『阿波学会紀要』45 徳島県立図書館
- 岸江信介・石田祐子・中井精一・鳥谷善史 (1999) 「エクセルとファイルメー
カープロを利用した言語地図の作製—大阪府言語地図と徳島県言語地
図を作る—」第15回西日本国語国文学データベース研究会発表原稿
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房
- 金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語11 方言』岩
波書店
- 金田一春彦 (1995) 『増補 日本の方言 アクセントの変遷とその実相』教育
出版
- 佐藤栄作編 (1989) 『アクセント史関係方言録音資料アクセント史料索引別
冊』アクセント史資料研究会
- 関口美智代 (1988) 「一拍名詞第一類・二拍名詞第三類三拍名詞第四類におけ
る徳島型アクセントと池田型アクセントとの境界線について」徳島大
学卒業論文
- 徳川宗賢 (1981) 『日本語の世界8 言葉・西と東』中央公論社
- 土居重俊 (1956) 「高知県僻地アクセント概観」『音声学会会報』92
- 中井幸比古・高田豊輝・大和シゲミ (1999) 『徳島市方言アクセント小辞典—
方言アクセント小辞典 (3)—』
- 森重幸 (1958) 「徳島県のアクセント概観」『国文論叢 (神戸大学)』7

- 森重幸 (1962) 「徳島県のアクセント—2音節名詞の考察—」『郷土研究発表会
紀要』6・7・8合併号 阿波学会・徳島県立図書館
- 森重幸 (1982) 「徳島県の方言」『講座方言学』8 国書刊行会
- 森重幸 (1984) 「徳島県三好郡池田町三縄(旧三縄村)出合アクセントと川崎
アクセント—二音節名詞アクセント体系の変化—」私家版
- 森重幸 (1989) 「徳島県の方言アクセント概観—32年後の動向—」私家版
- 森重幸 (1991) 「讃岐式池田型アクセントの周辺—一字型二拍名詞の音調考
察—」『阿波郷土会報ふるさと阿波』146
- 山口幸洋 (1982) 「アクセントにおける移行性分布の解釈」『国語学』130
- 大和シゲミ (1993) 「低起式語の音声的変種—徳島県阿南市宝田町の場合—」
『待兼山論叢』27日本学篇
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
- 木屋平村史編集委員会編 (1996) 『改訂 木屋平村史』 木屋平村
- 青野壽郎・尾留川正平編 (1969) 『日本地誌第18巻香川県・愛媛県・徳島県・
高知県』日本地誌研究所

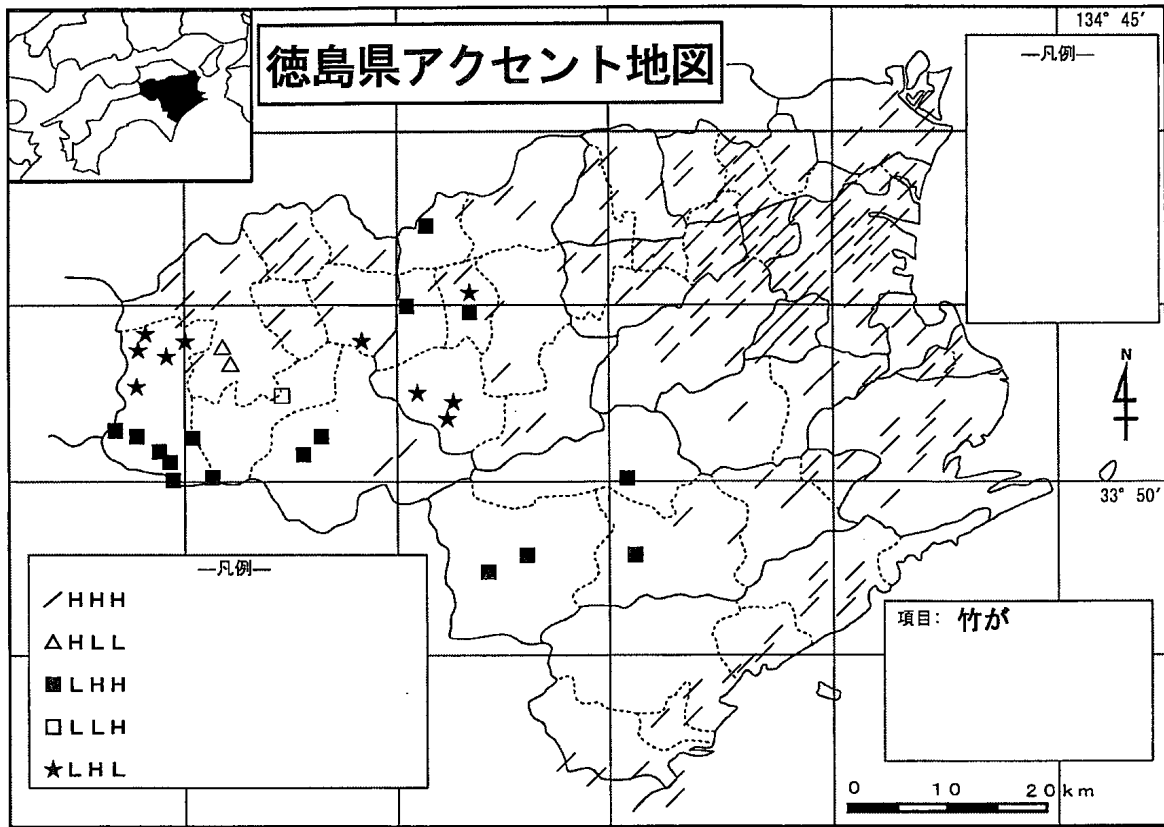


図4

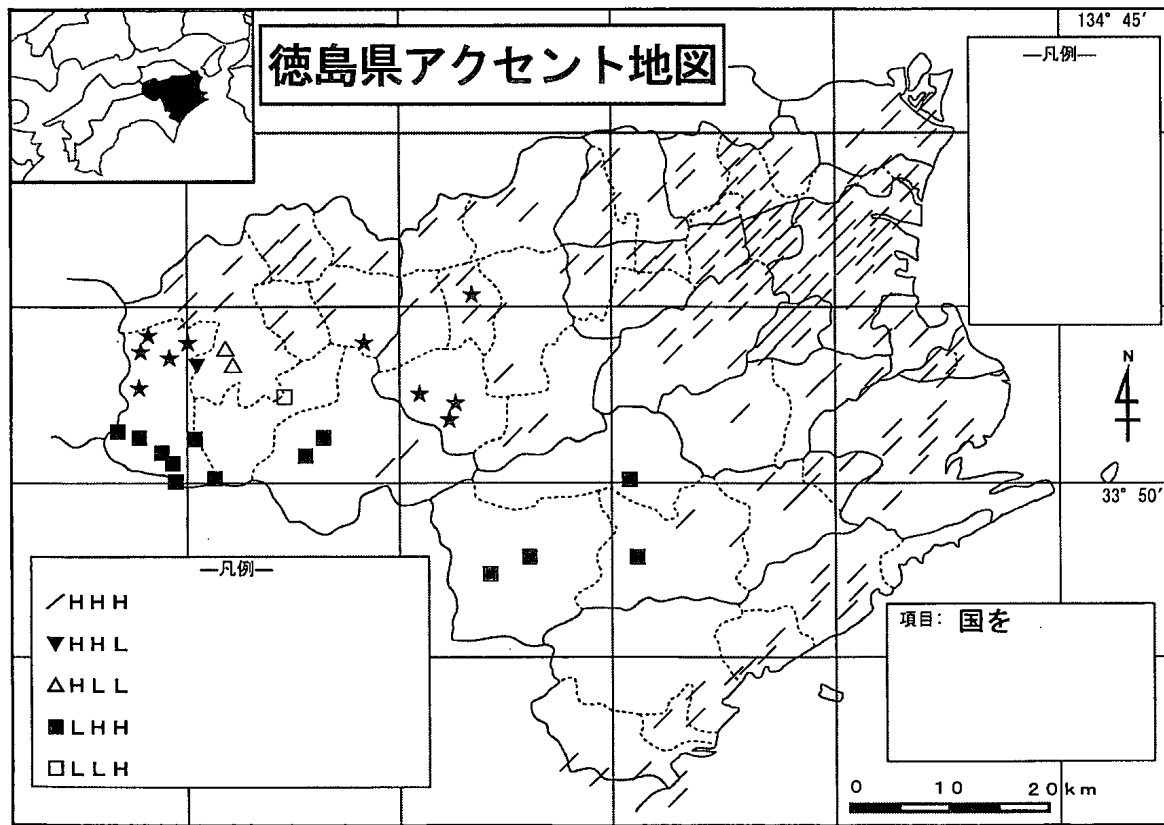


図5

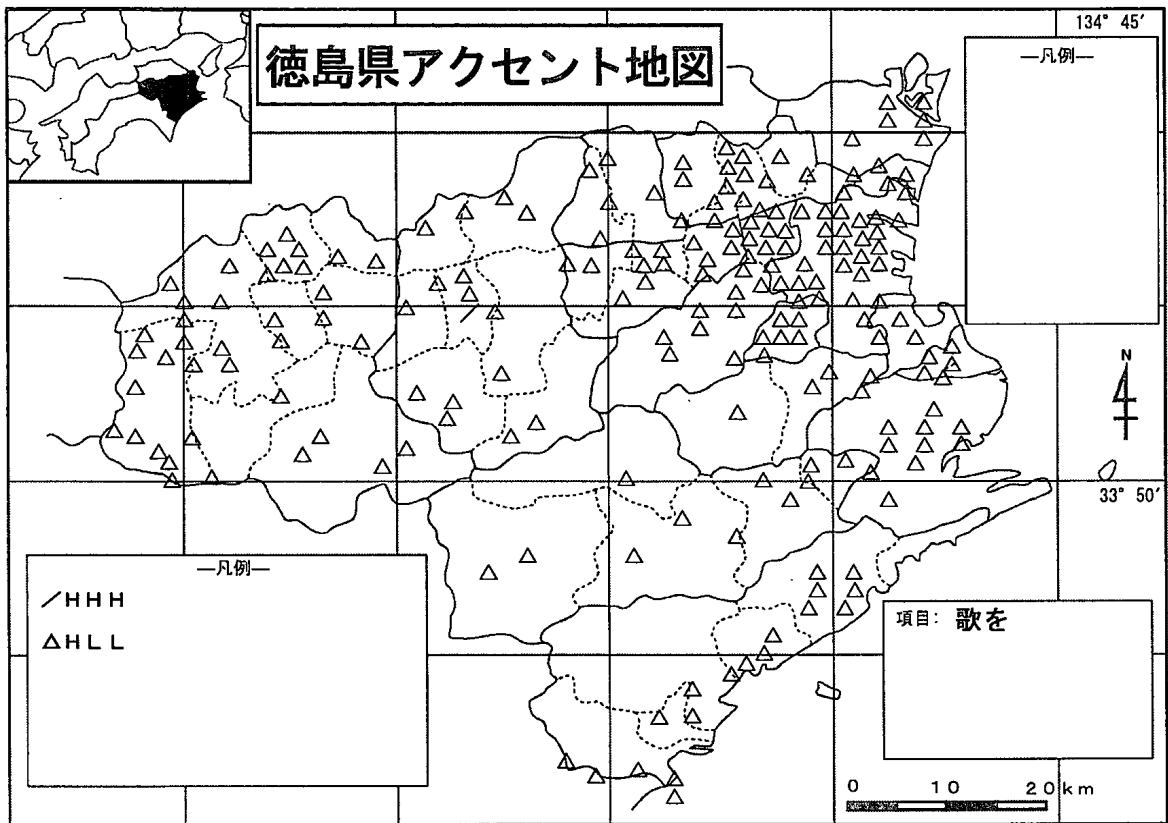


図 6

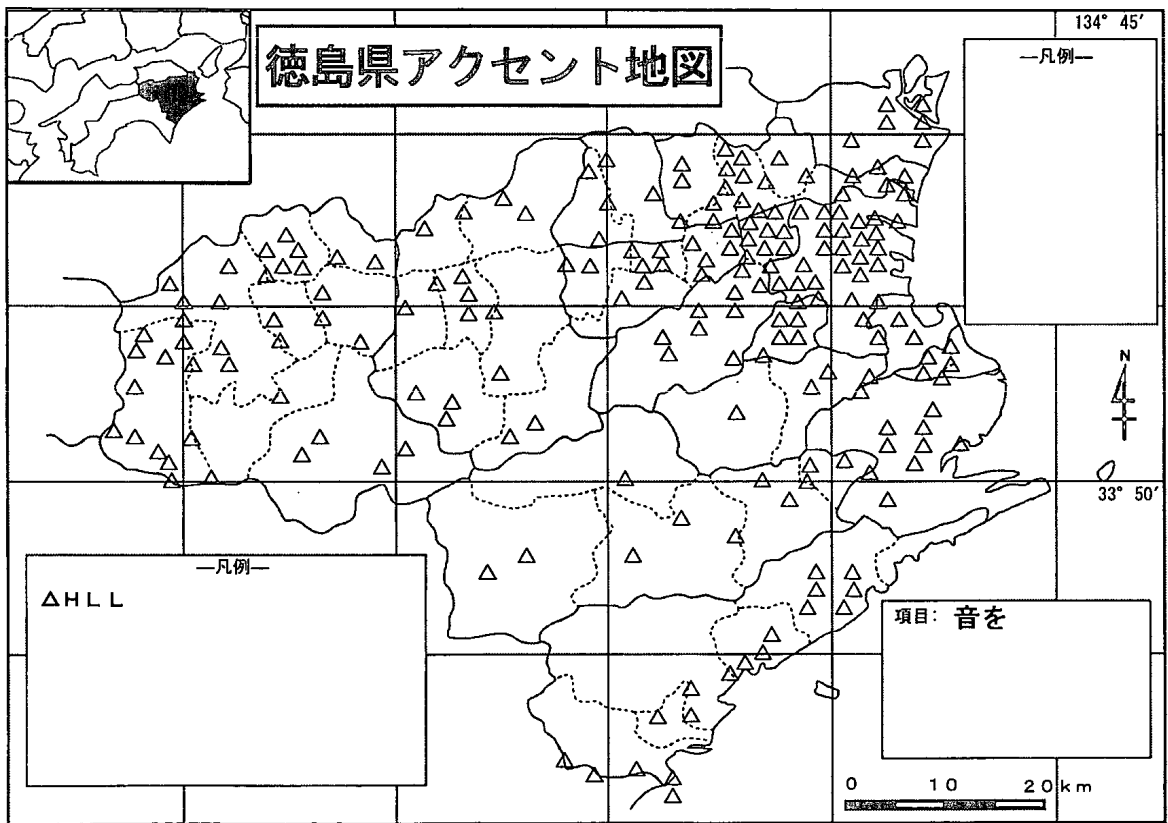


図 7

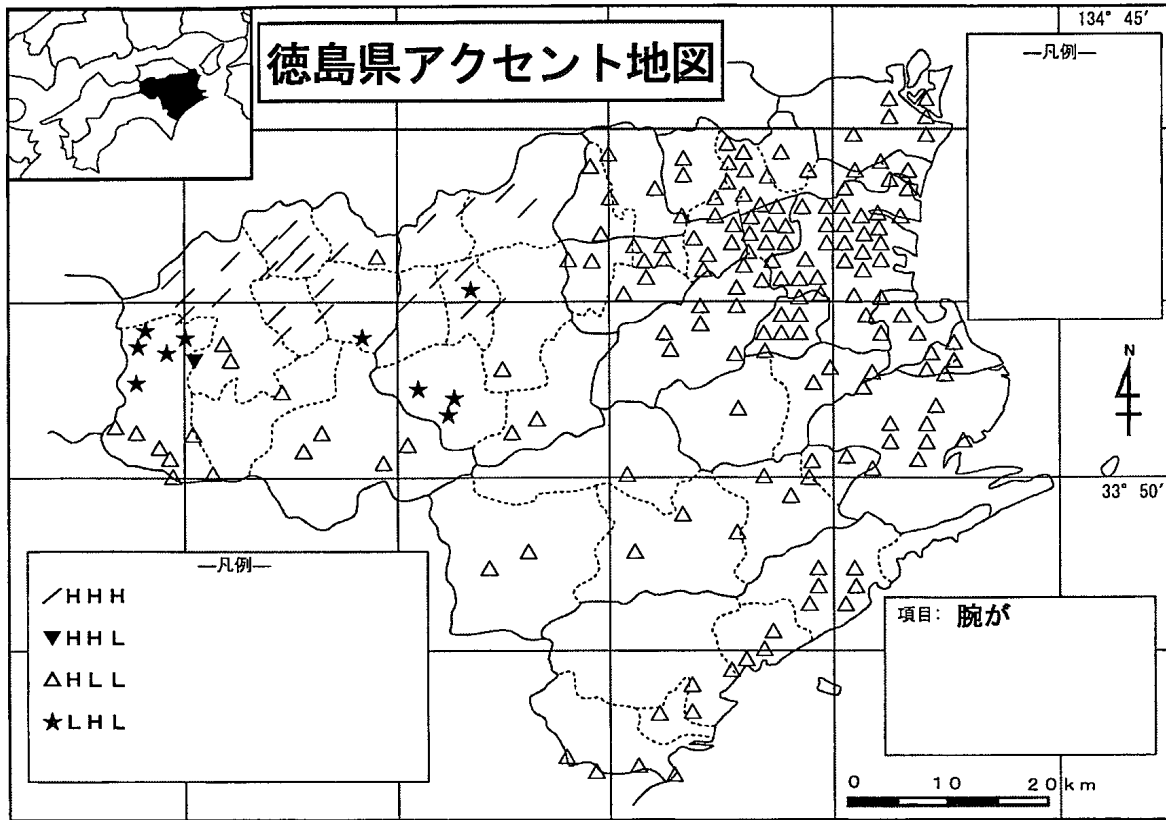


図 8

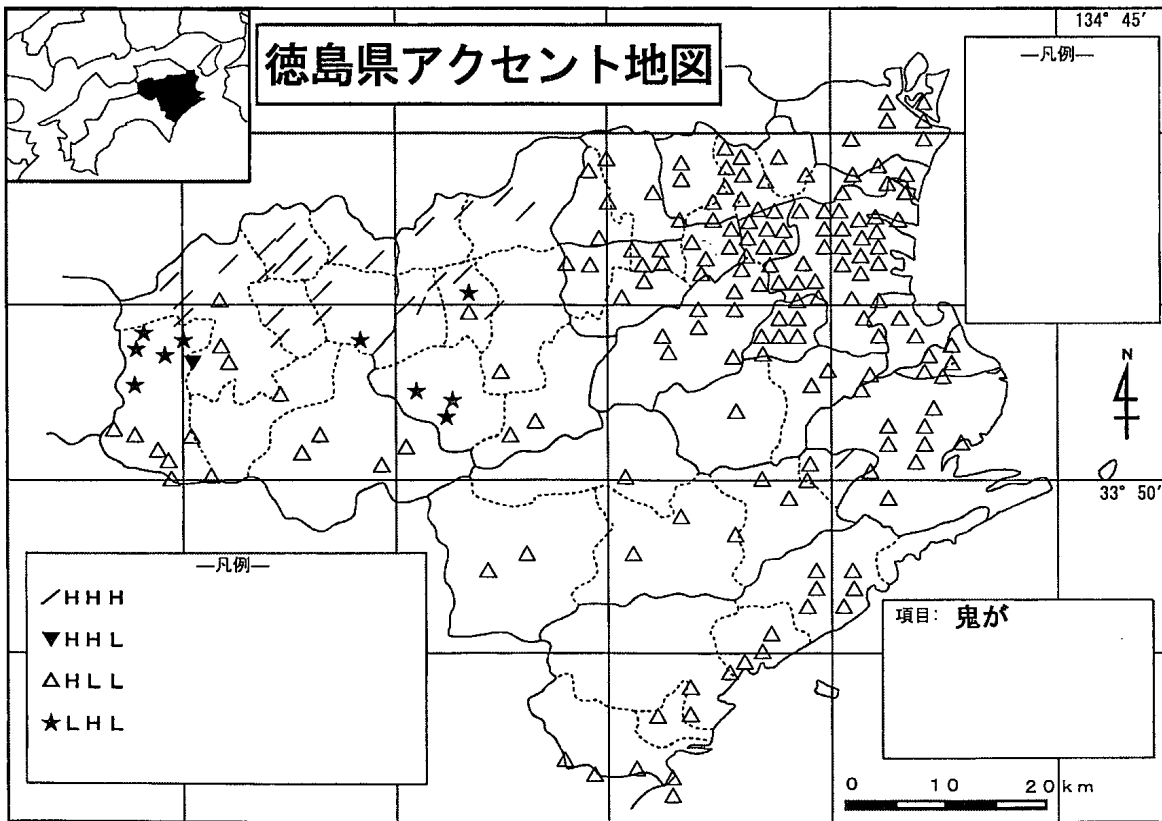


図 9

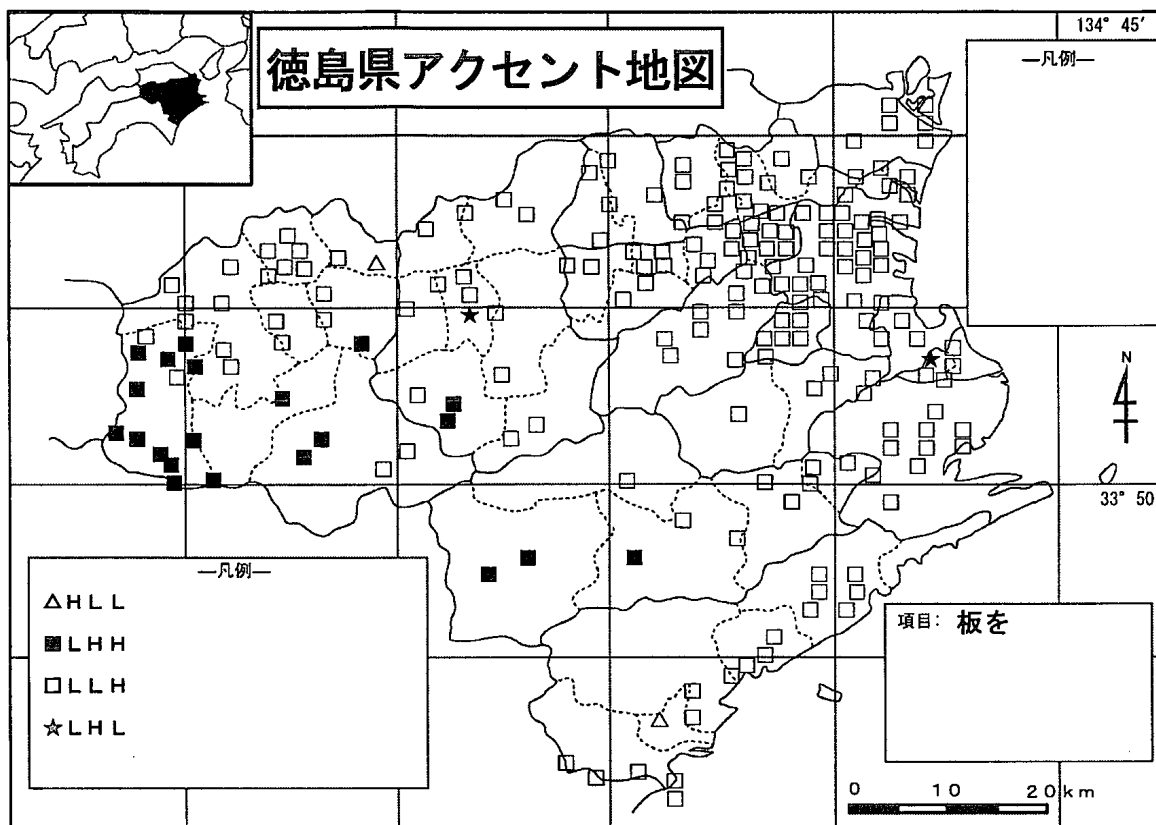


図10

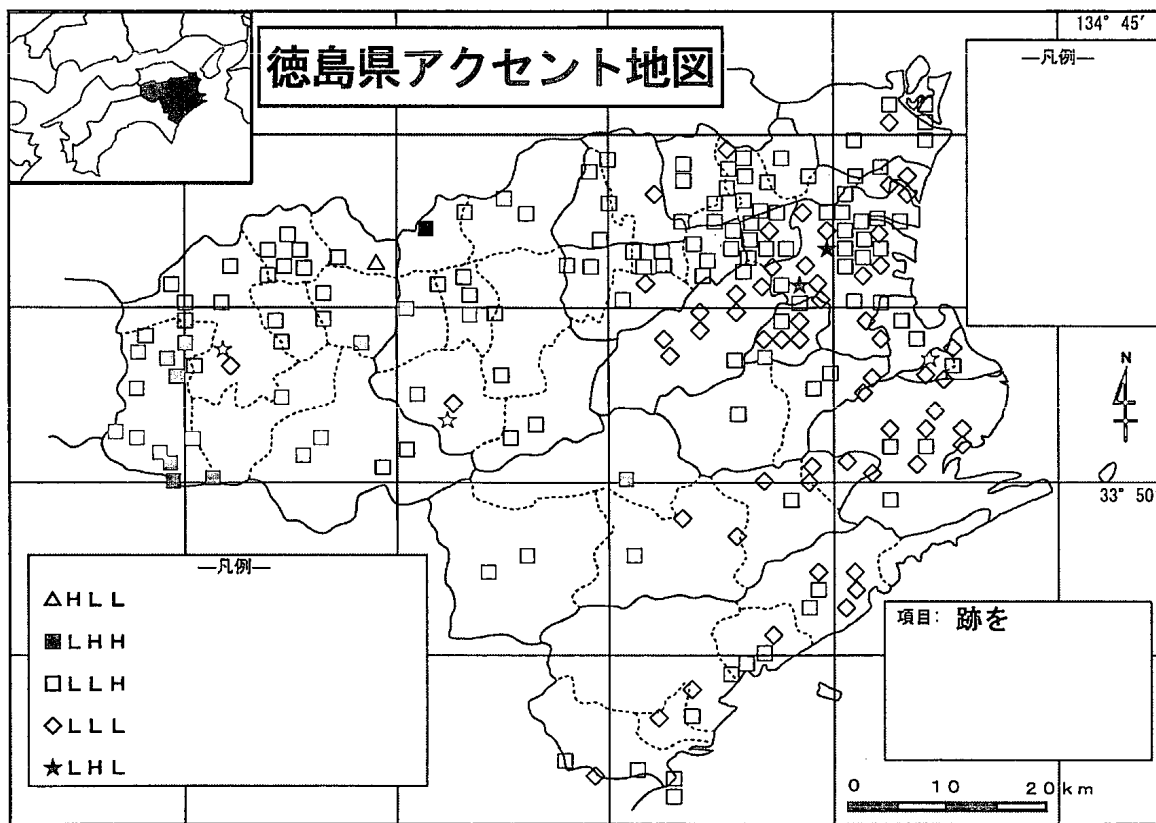


図11

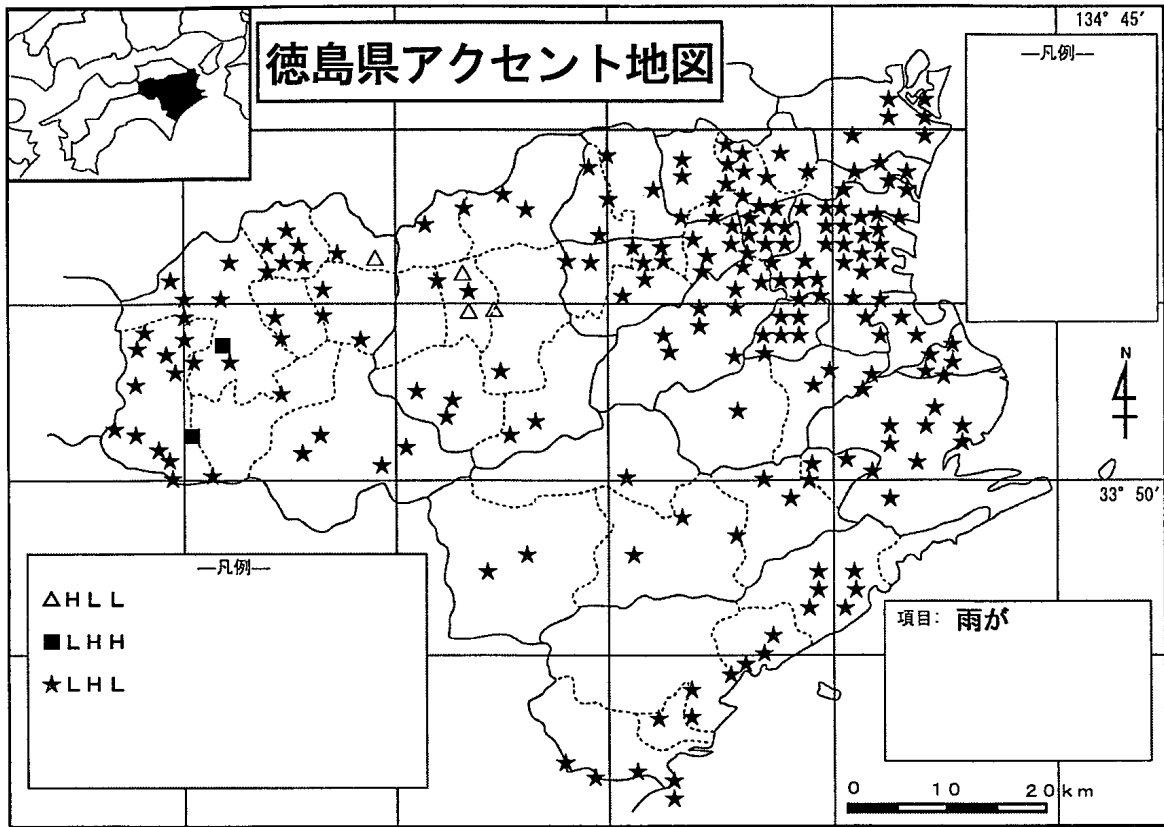


図12

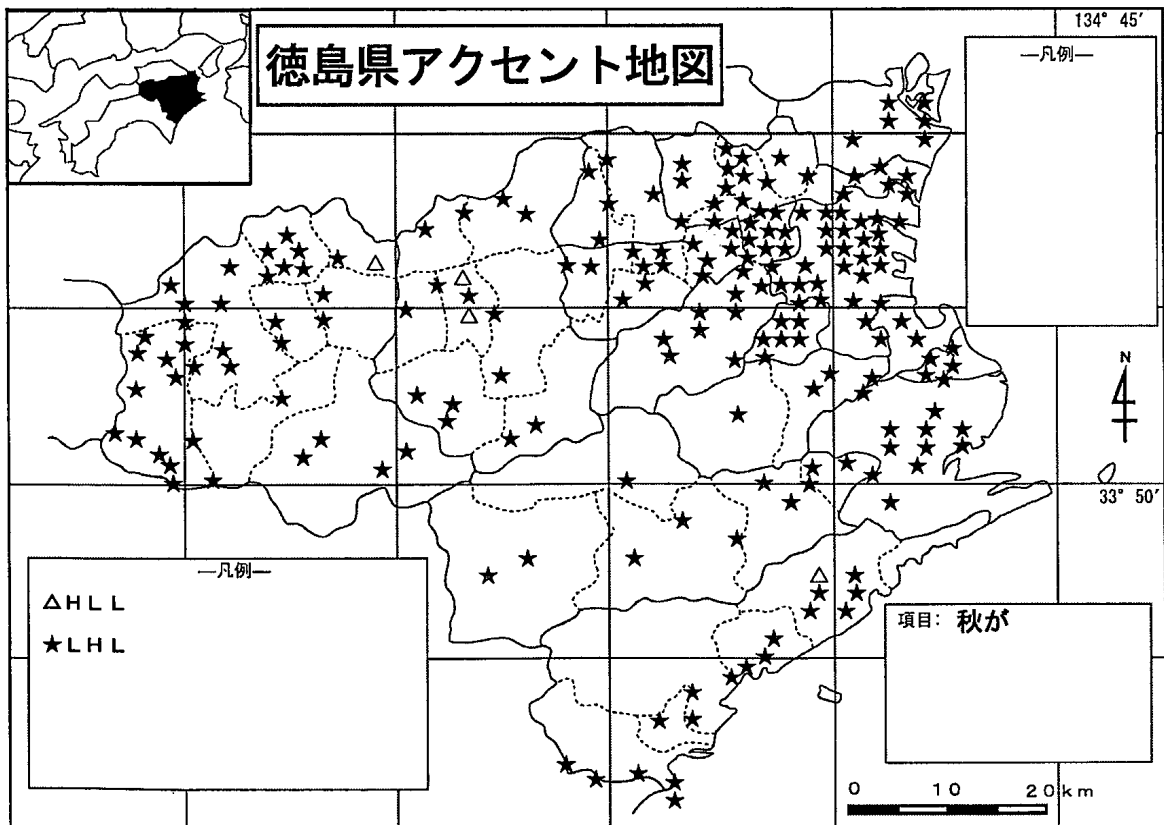


図13

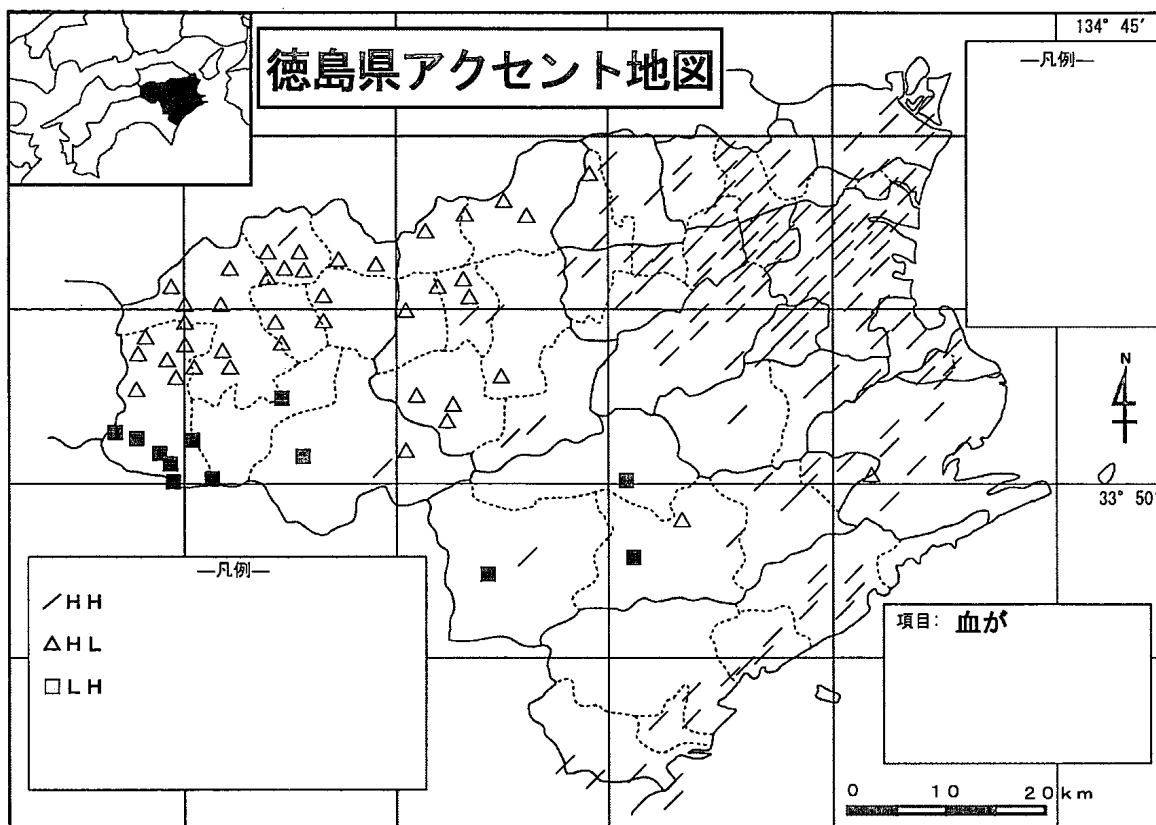


図14

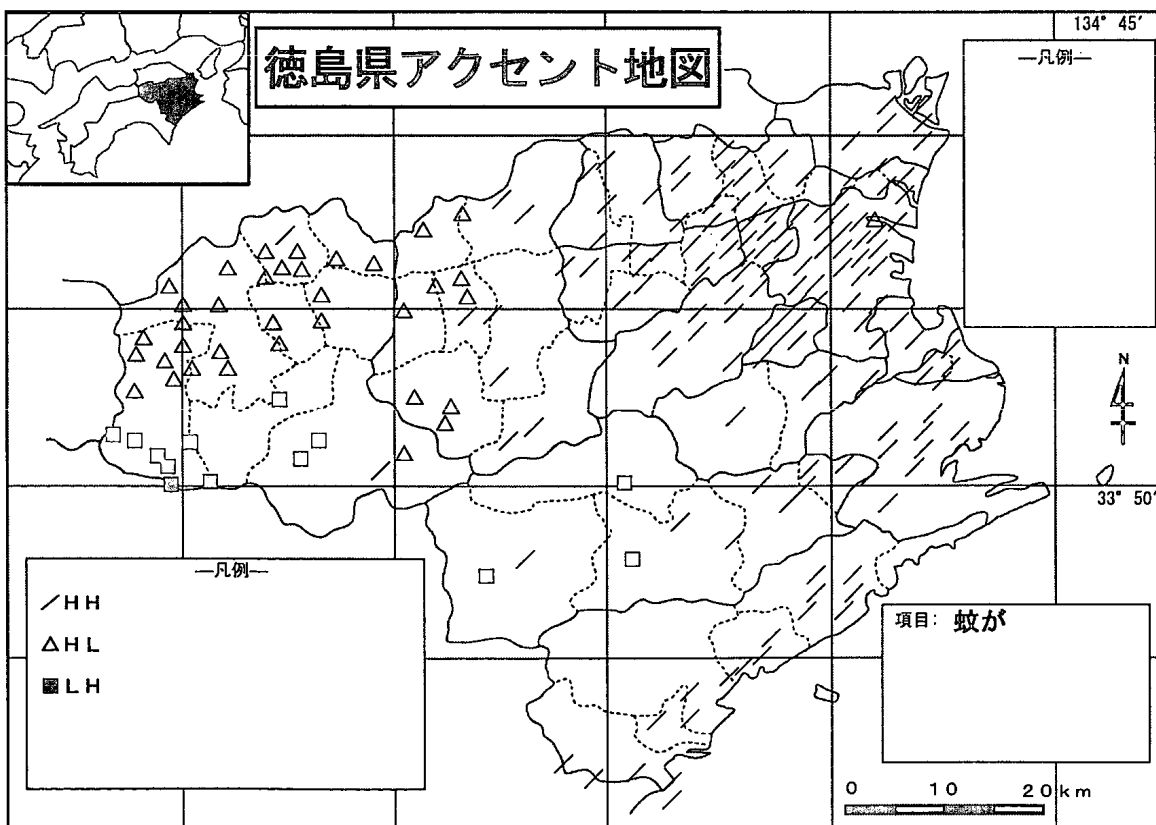


図15

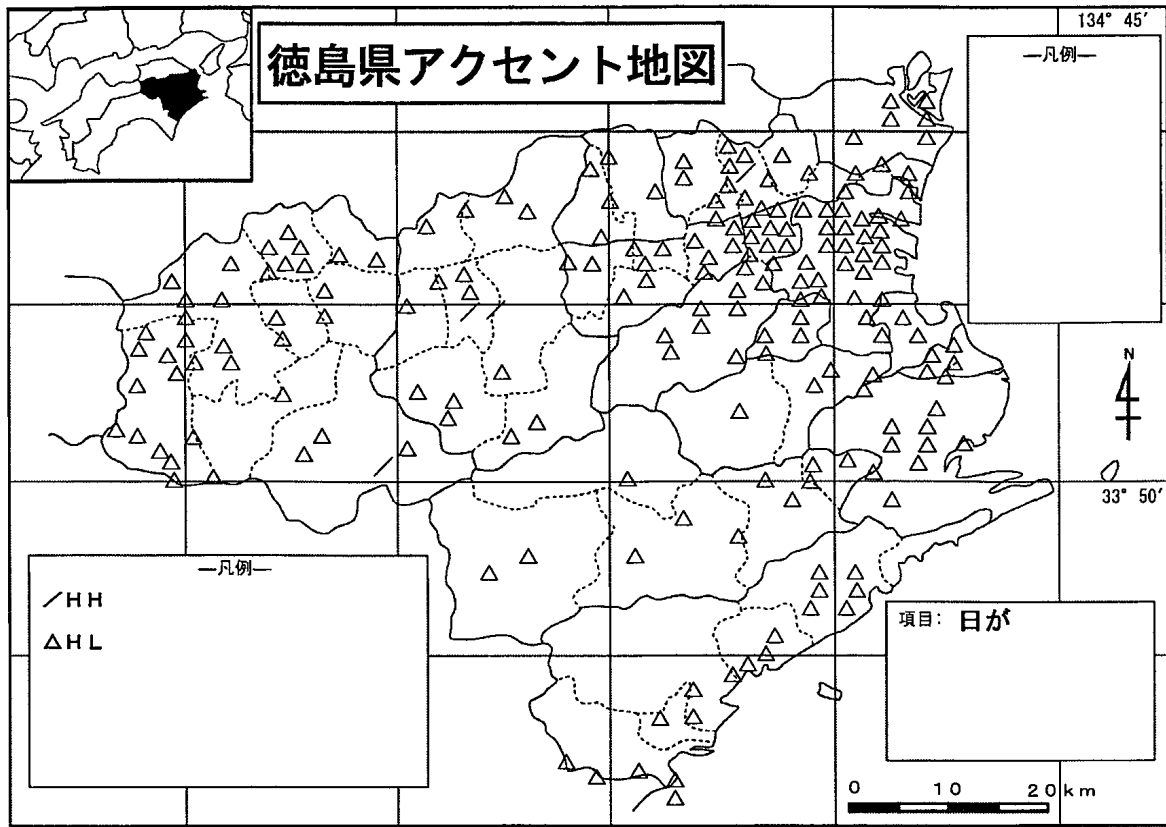


図16

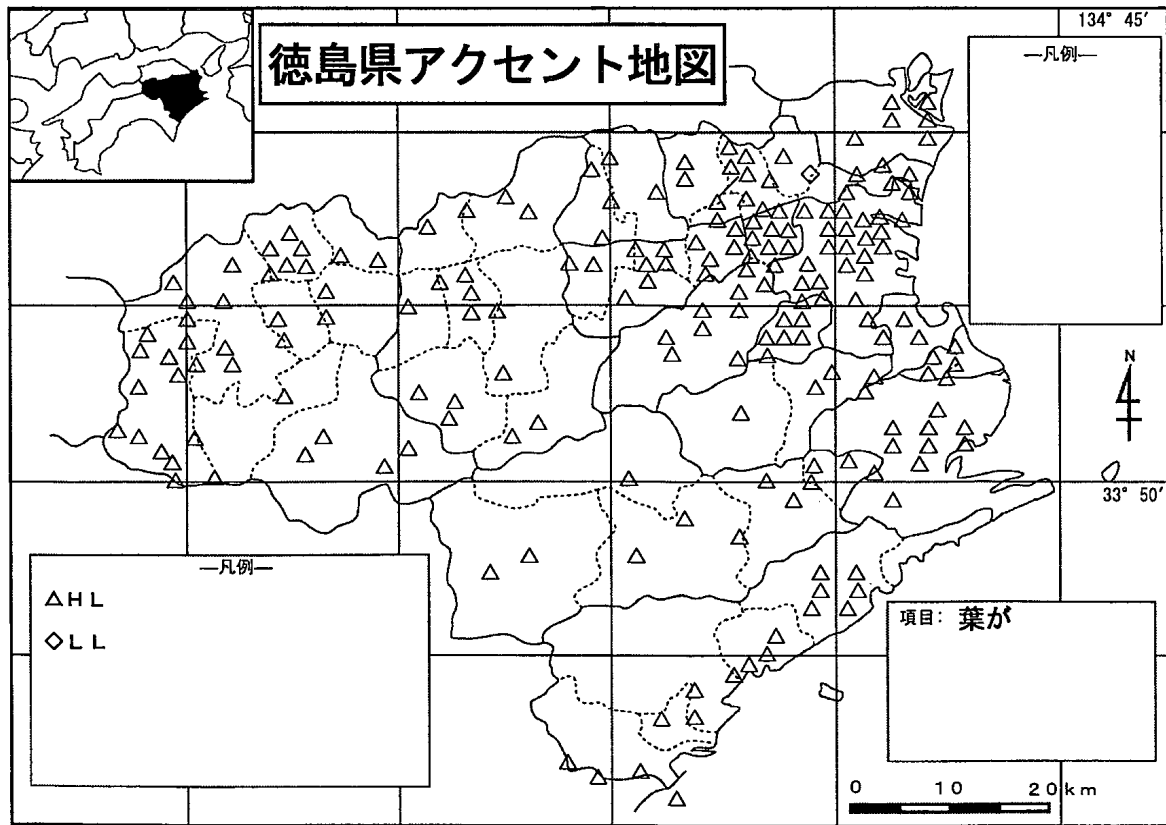


図17

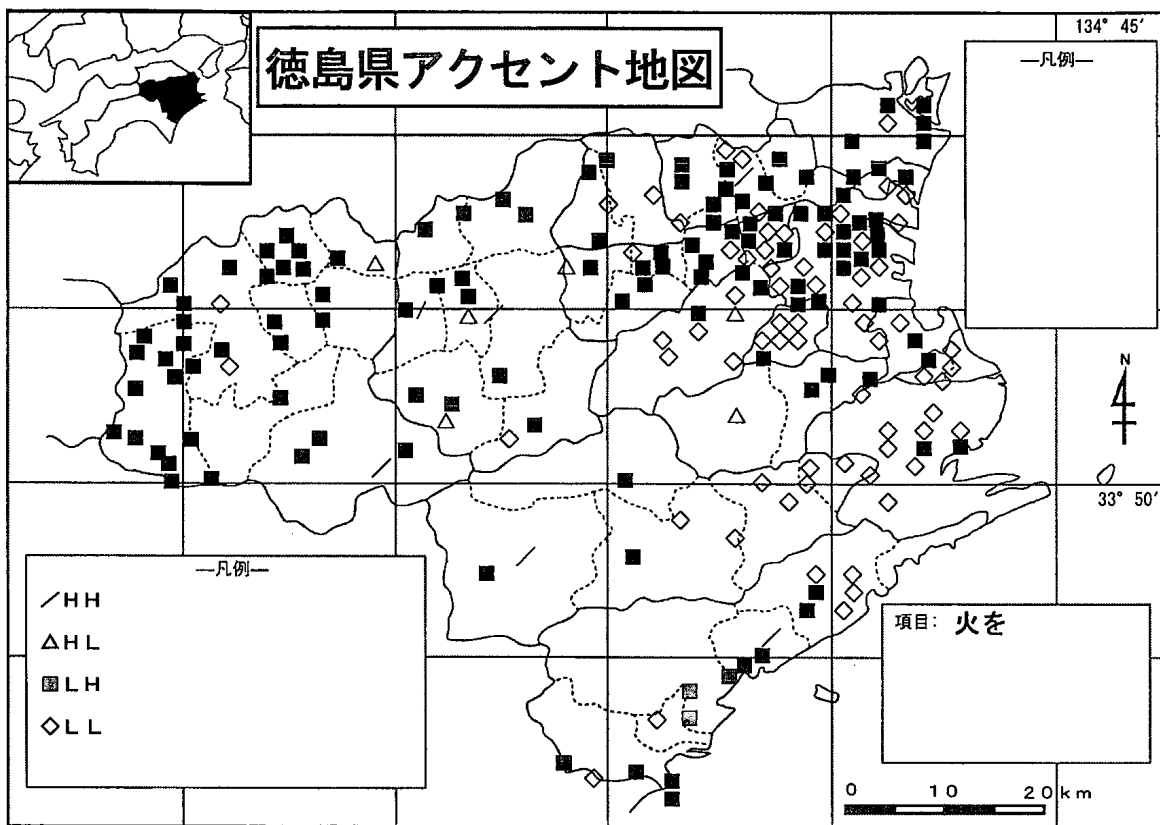


図18

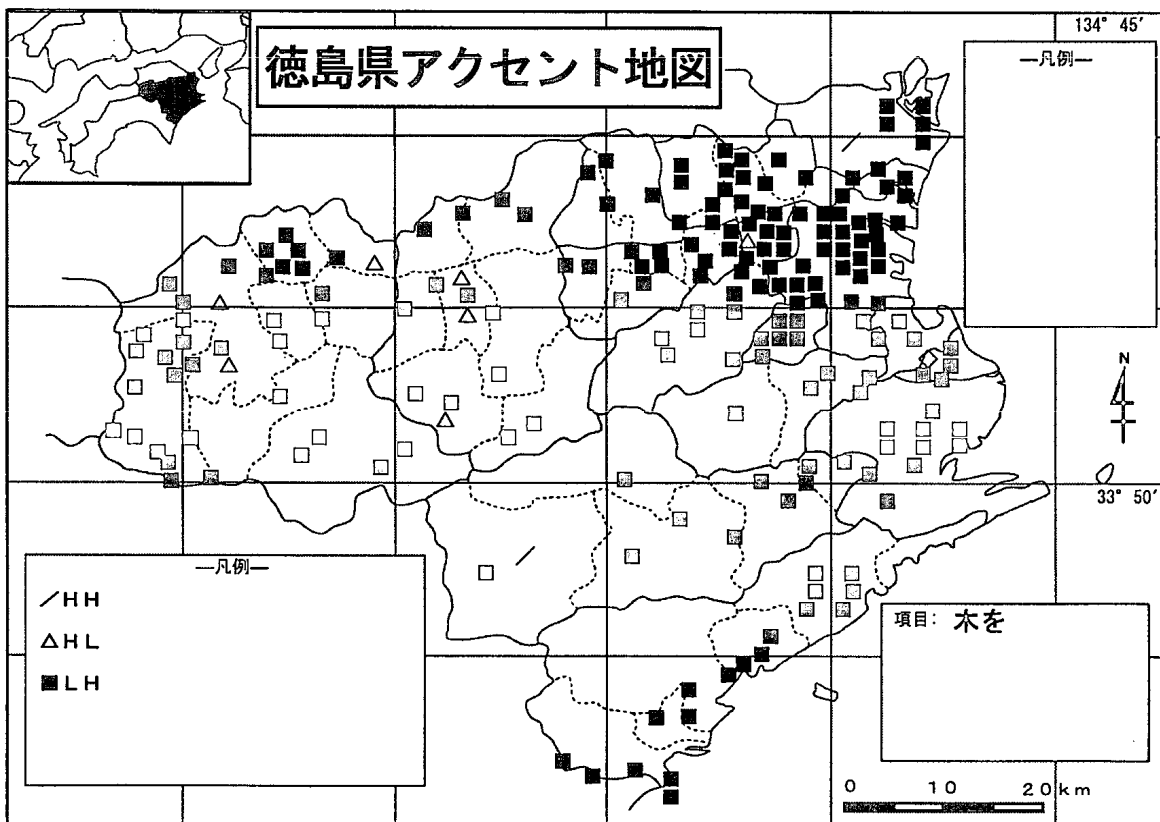


図19

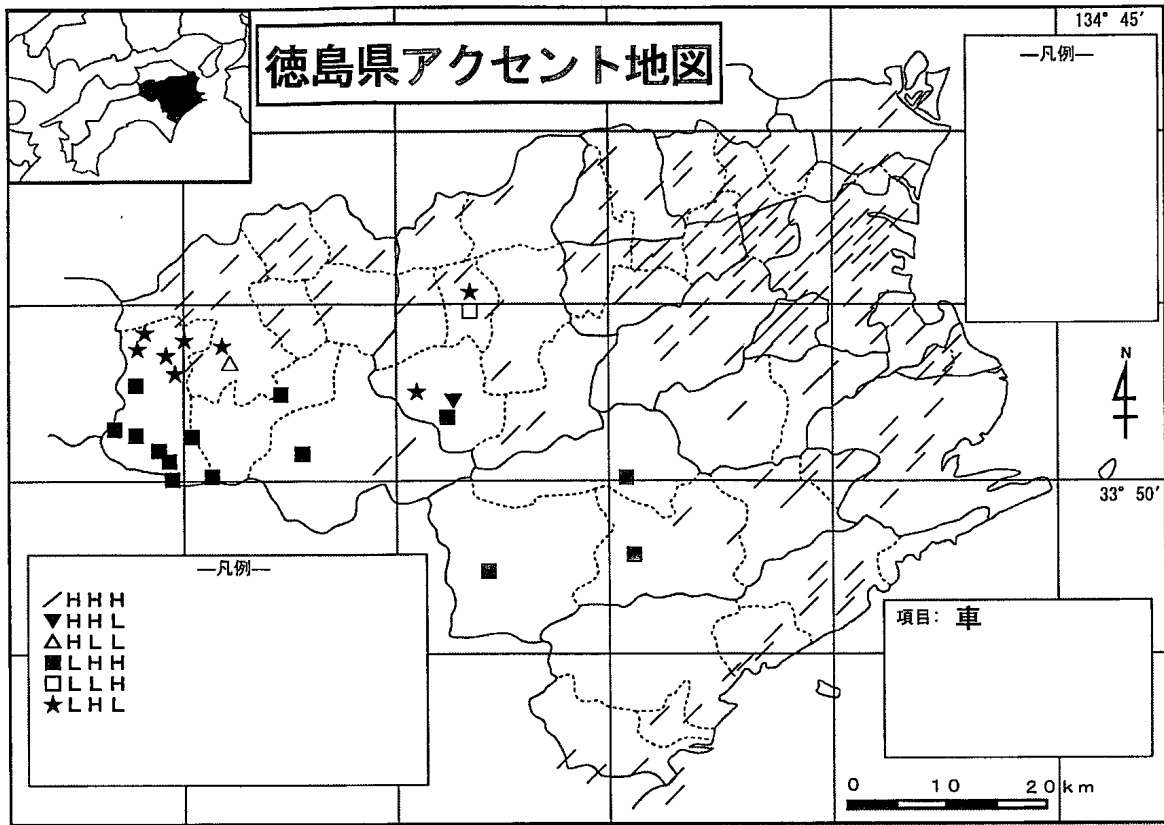


図20

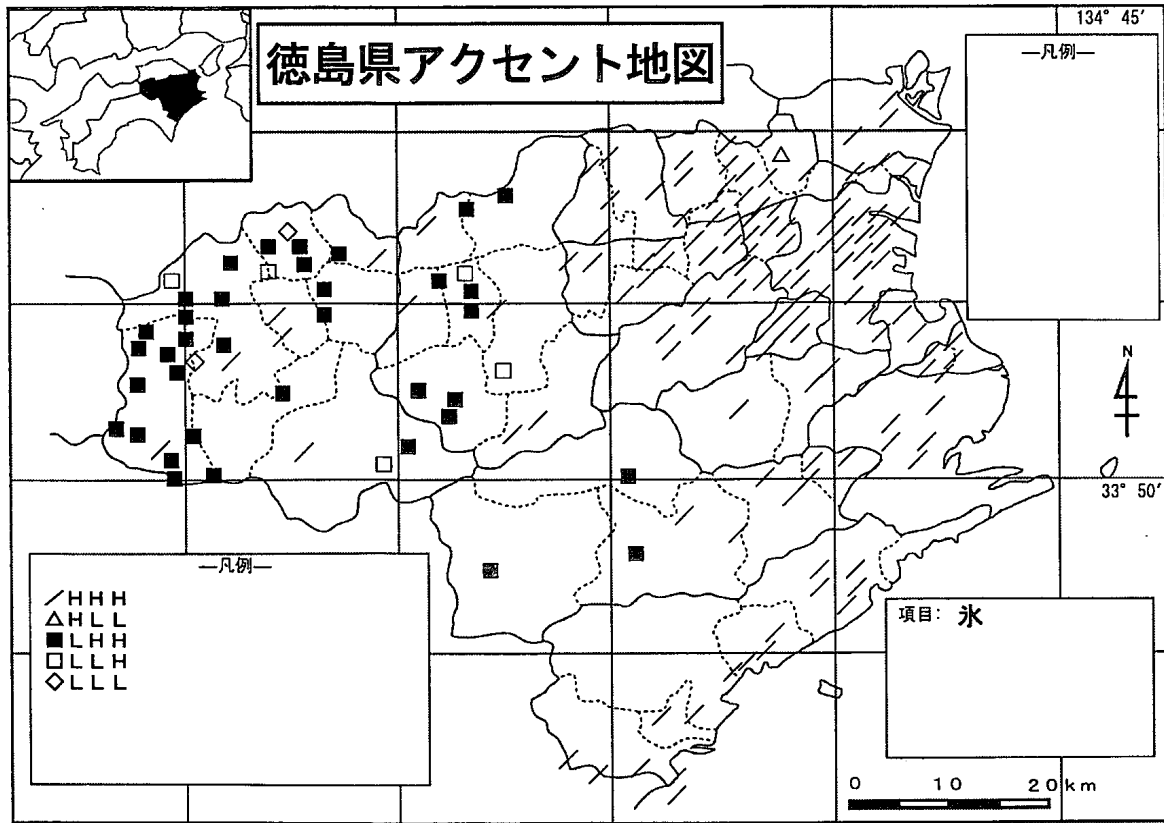


図21

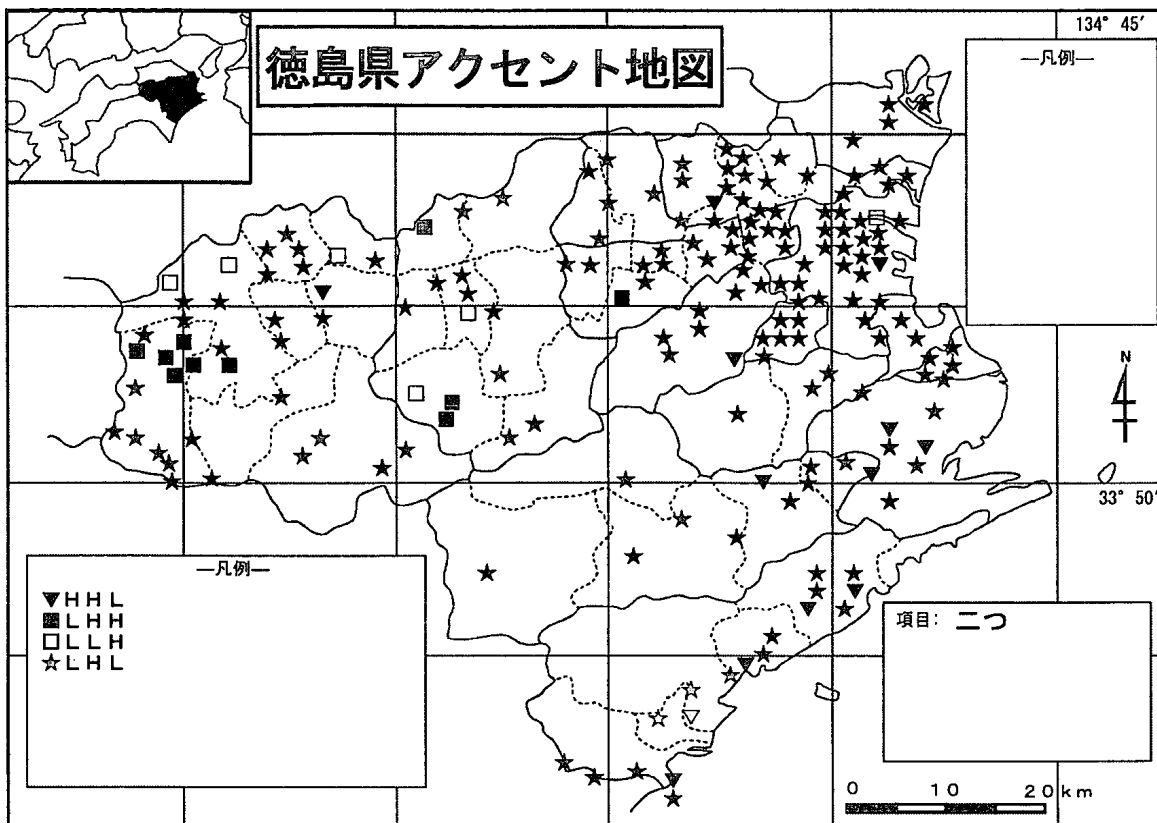


図22

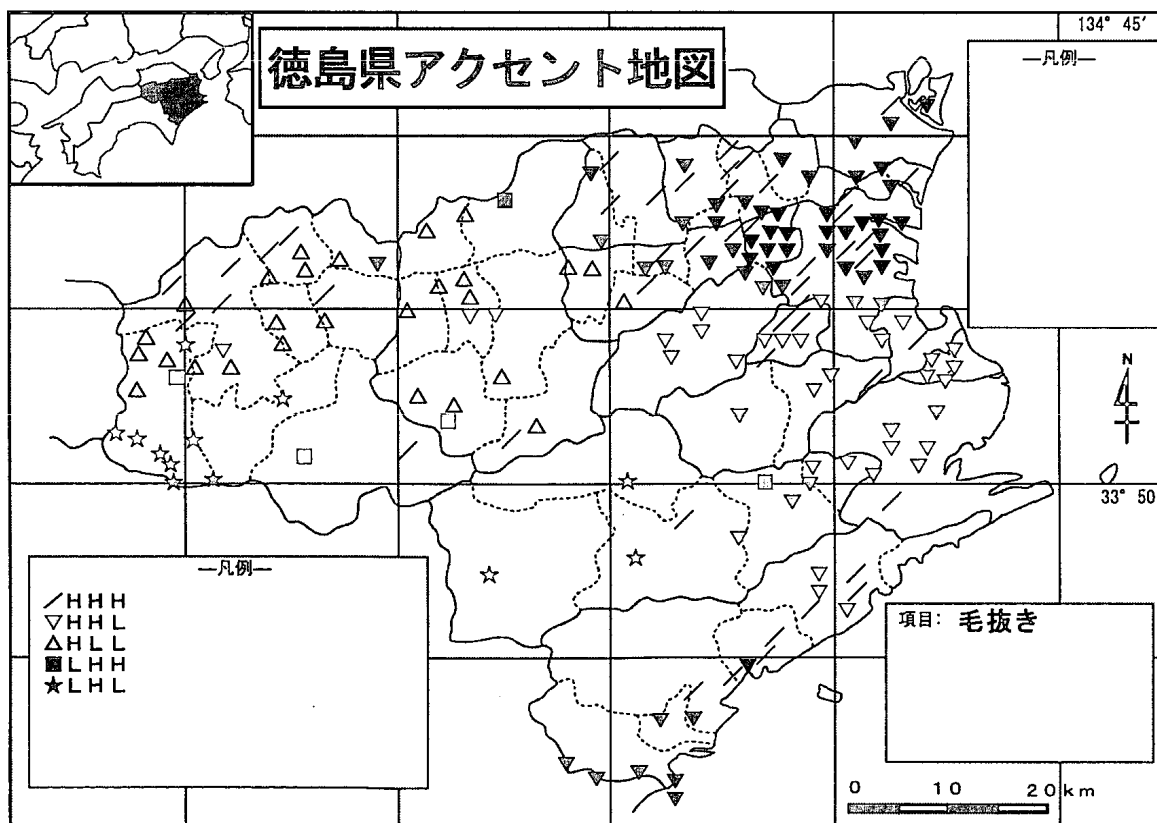


図23

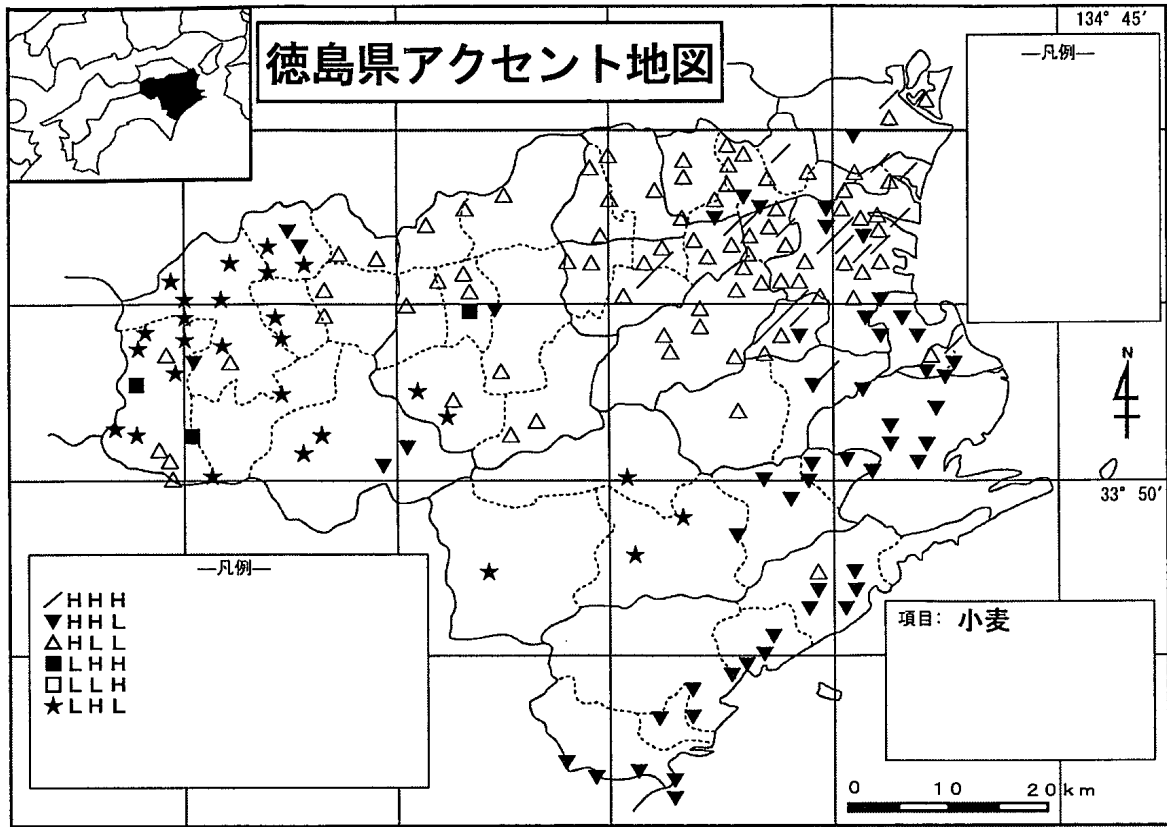


図24

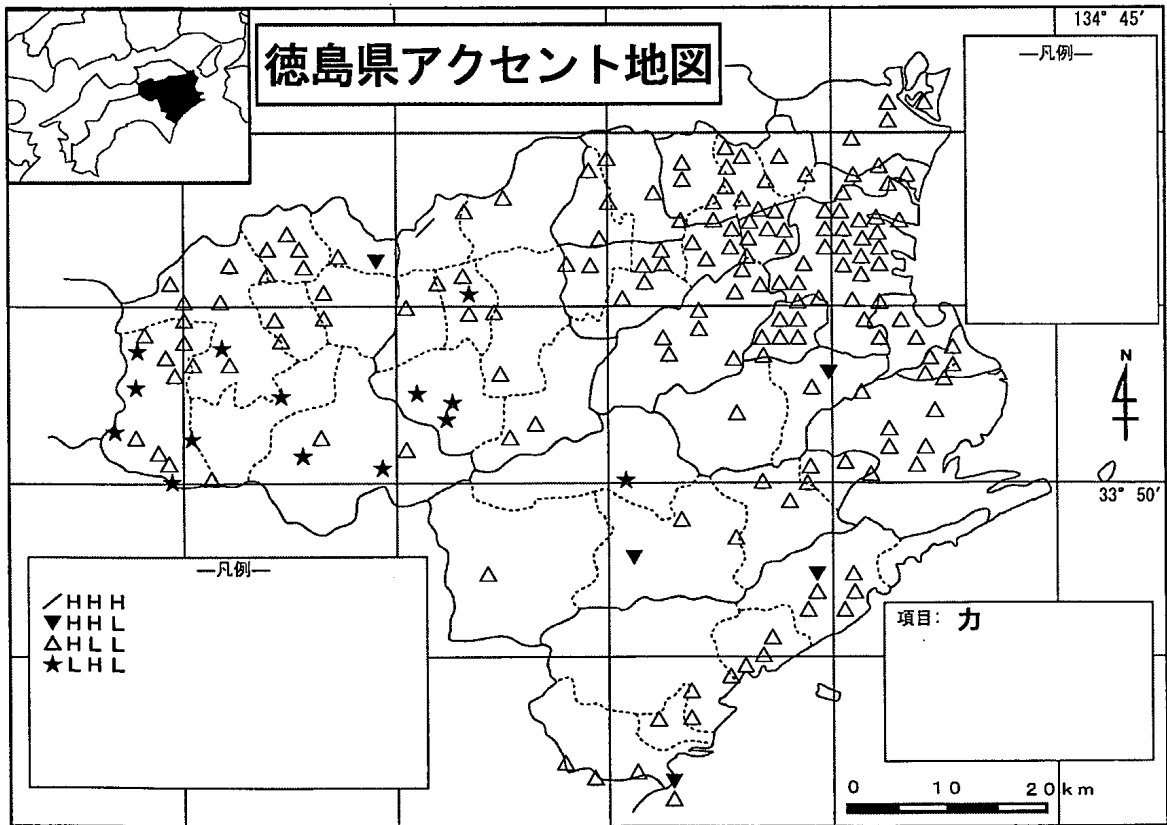


図25

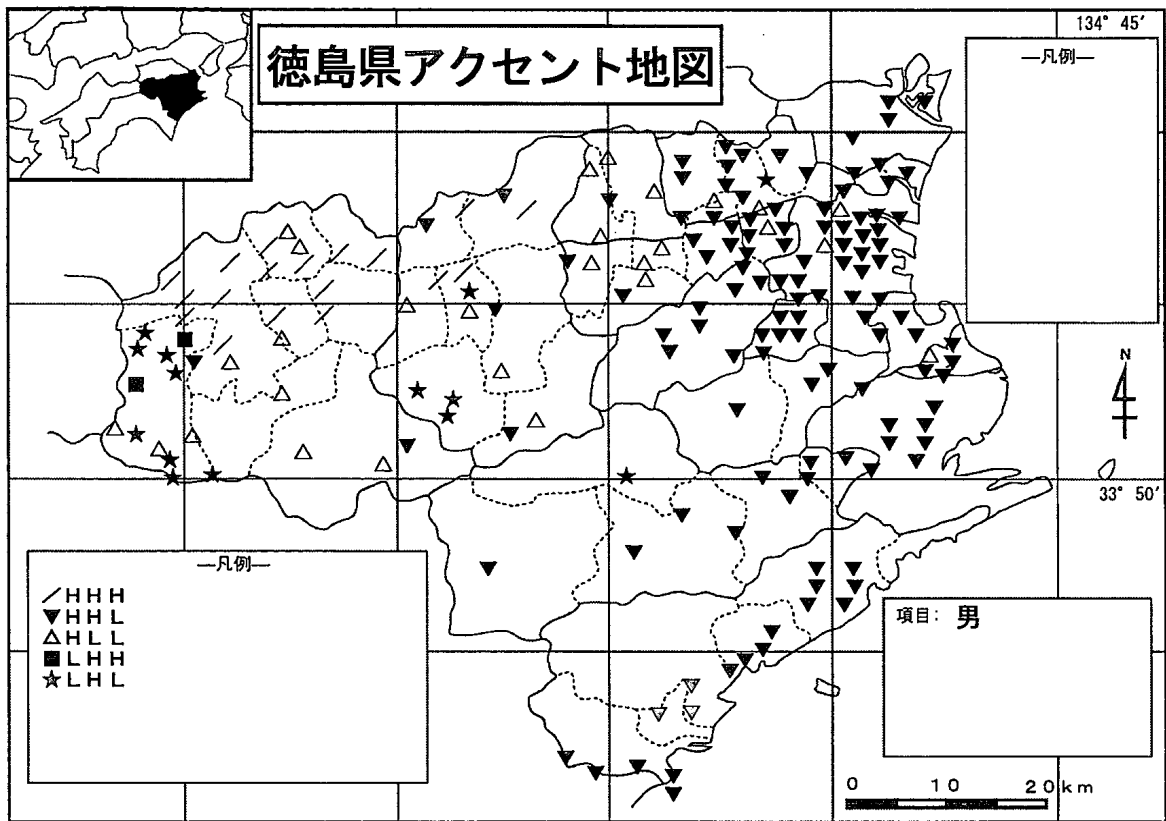


図26

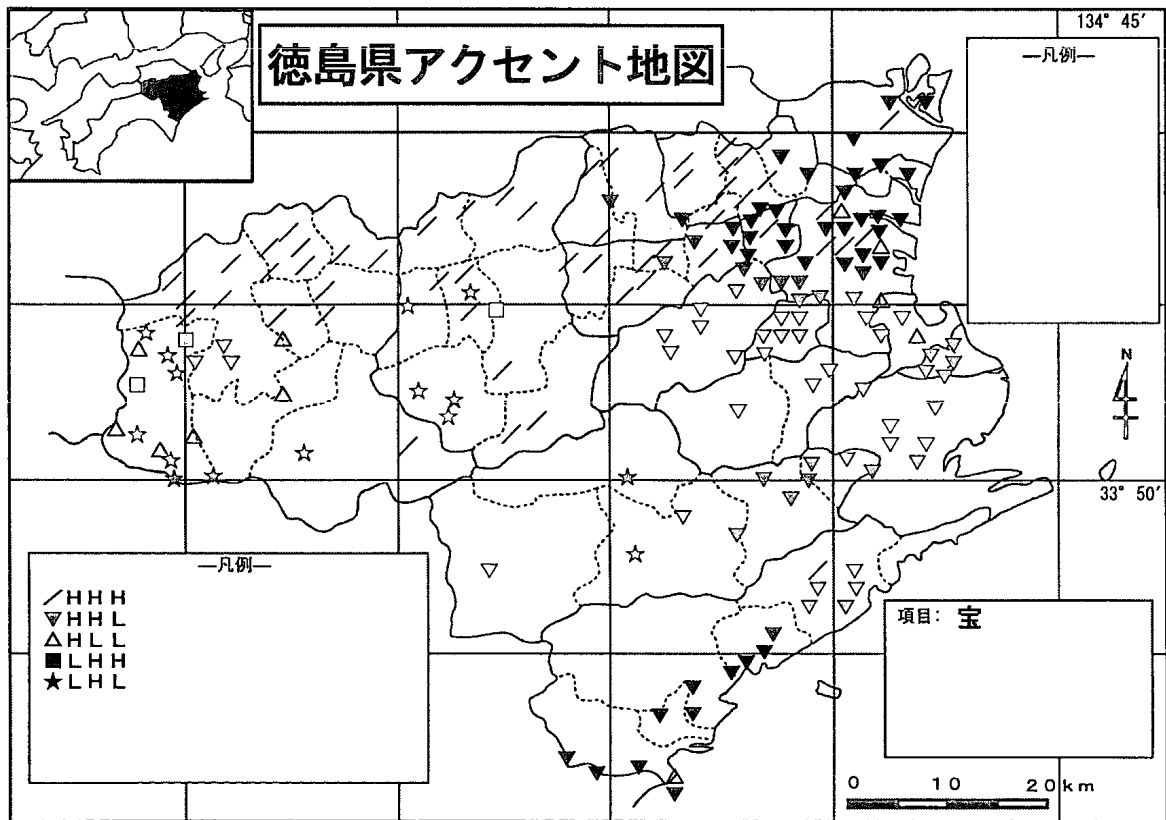


図27

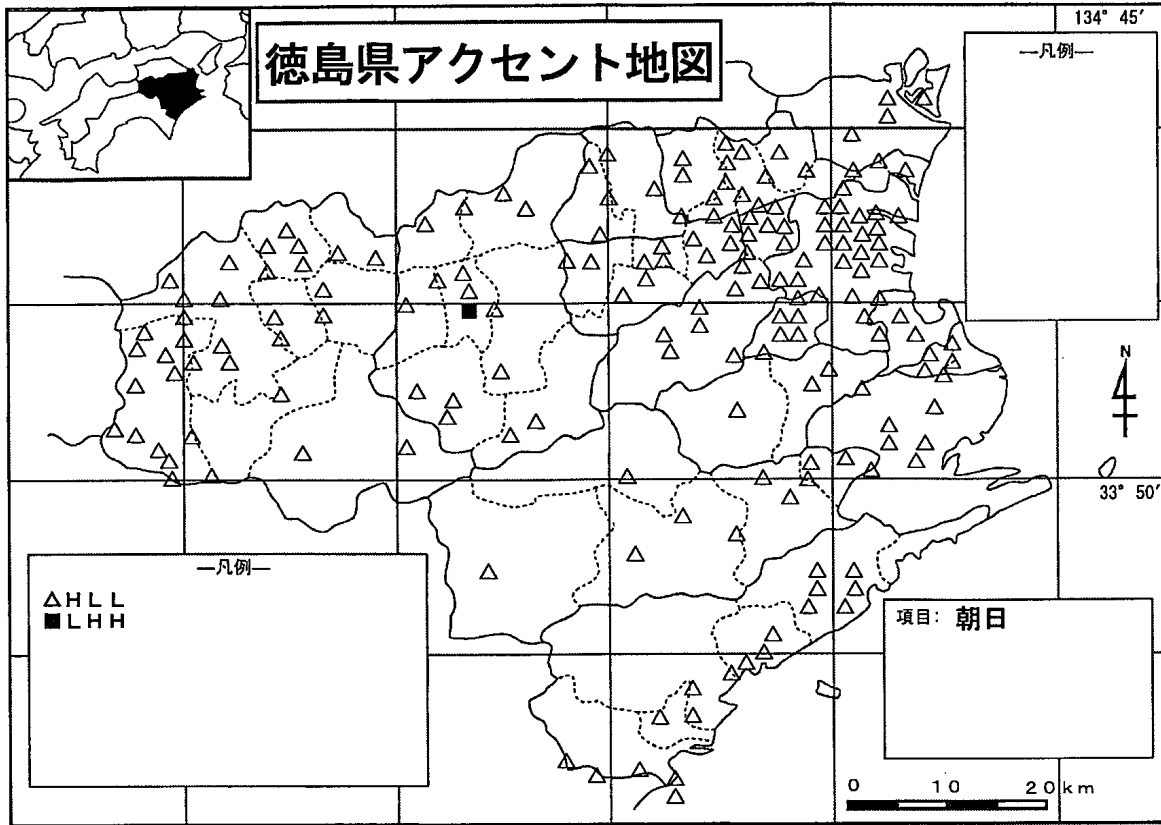


図28

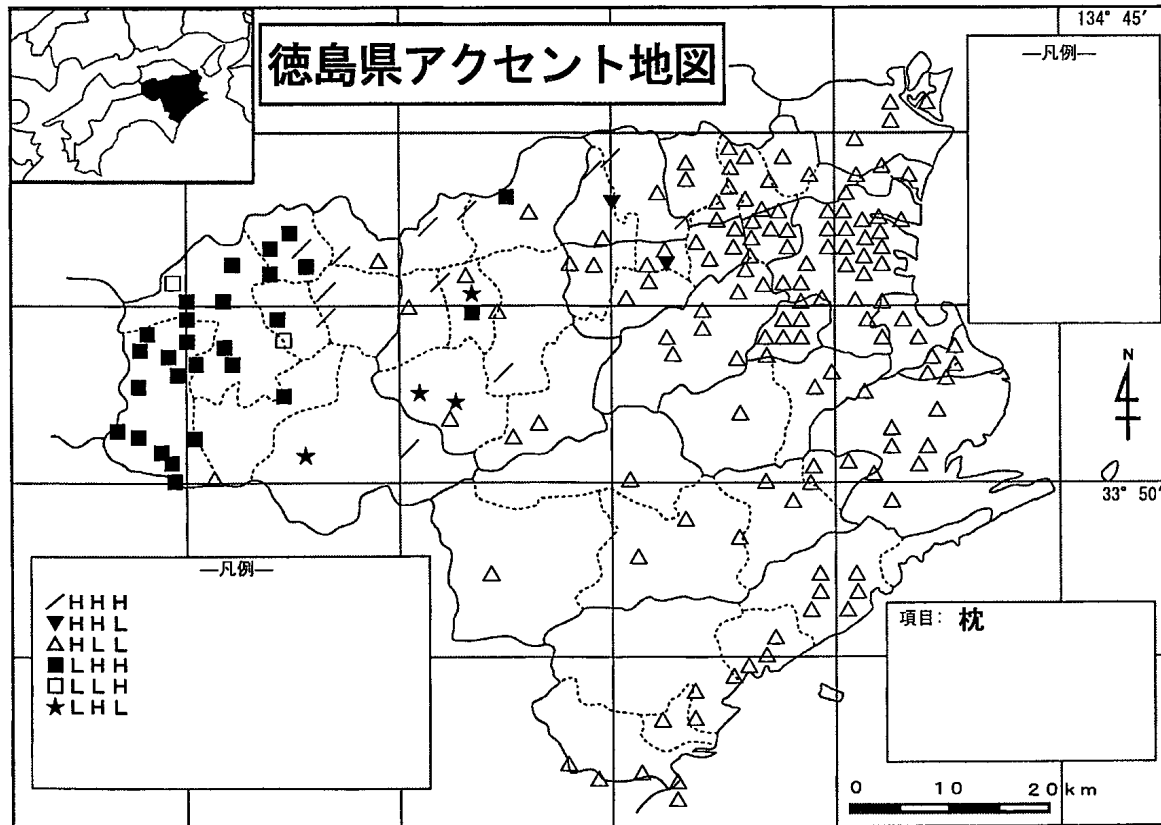


図29

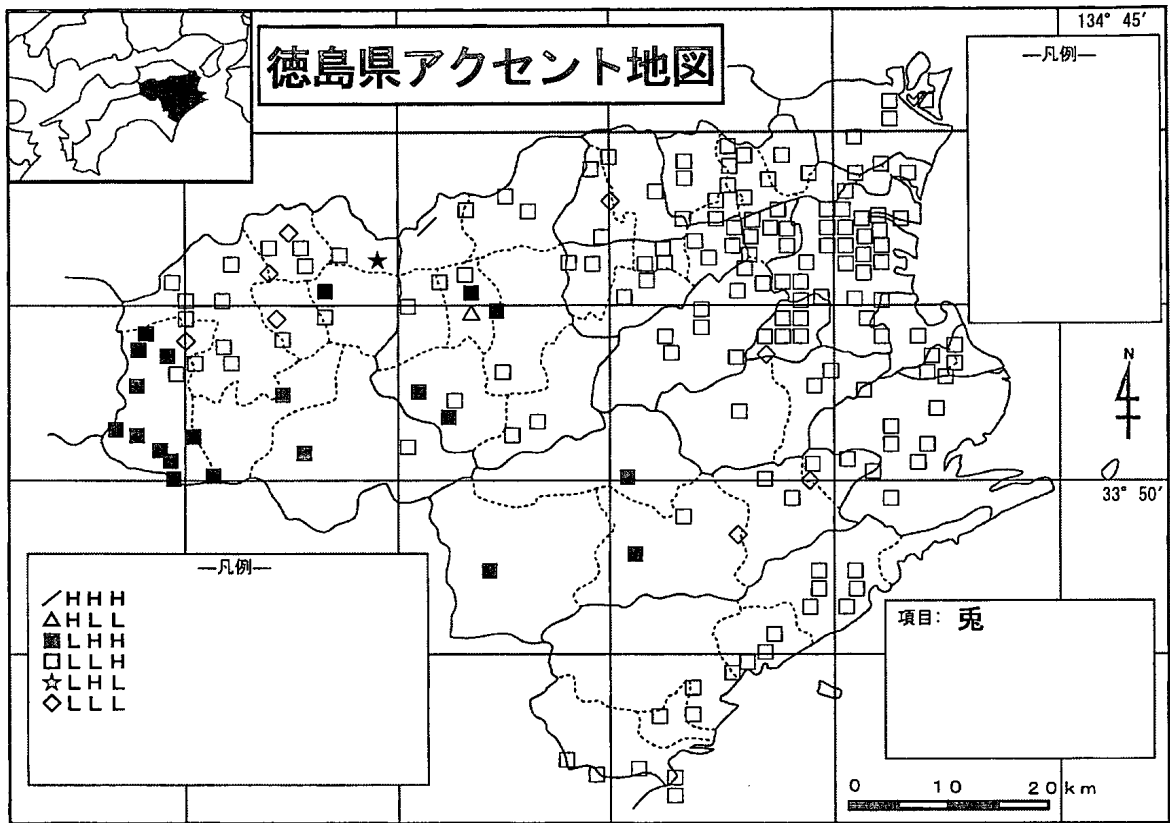


図30

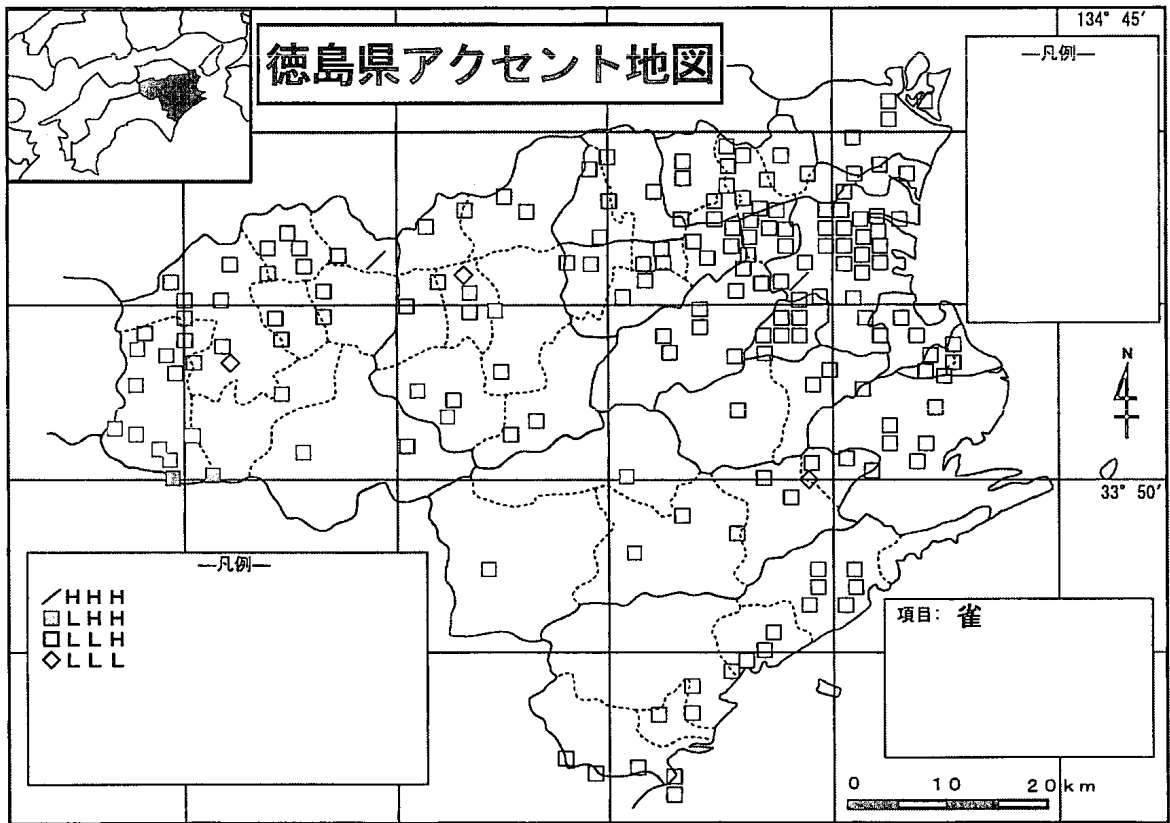


図31

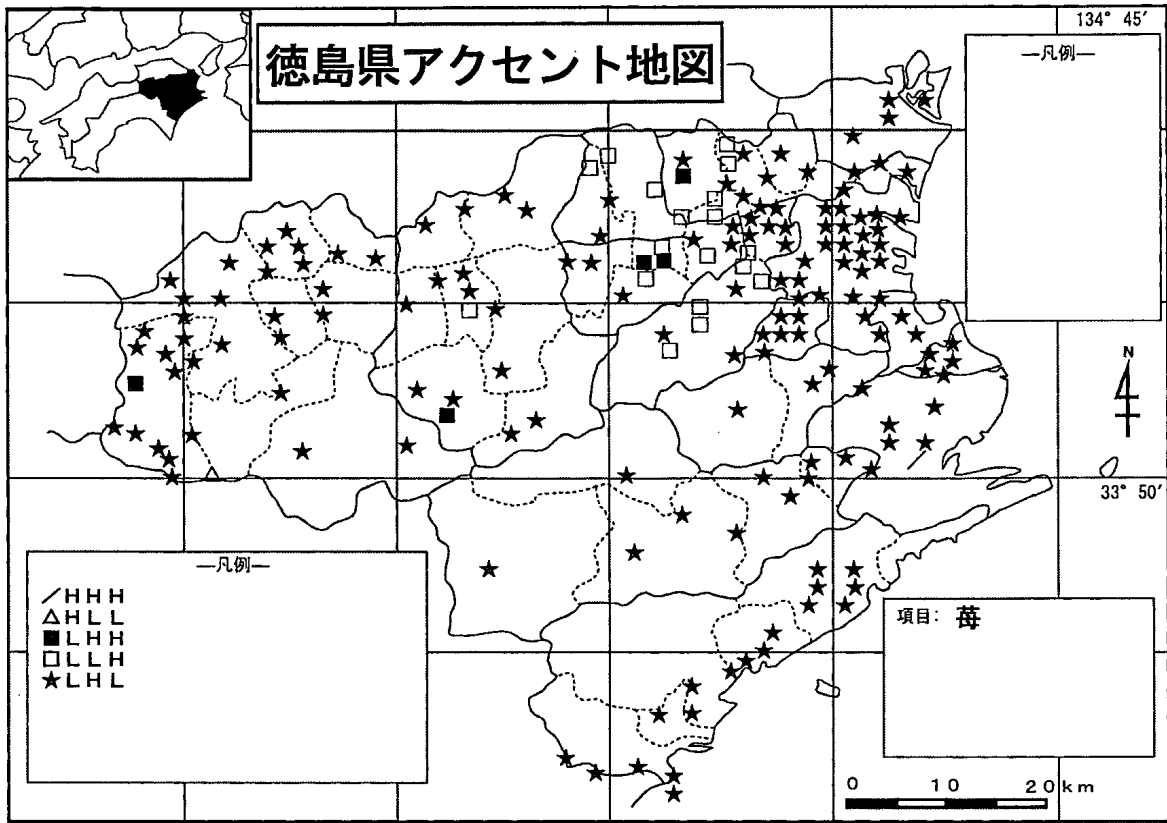


図32

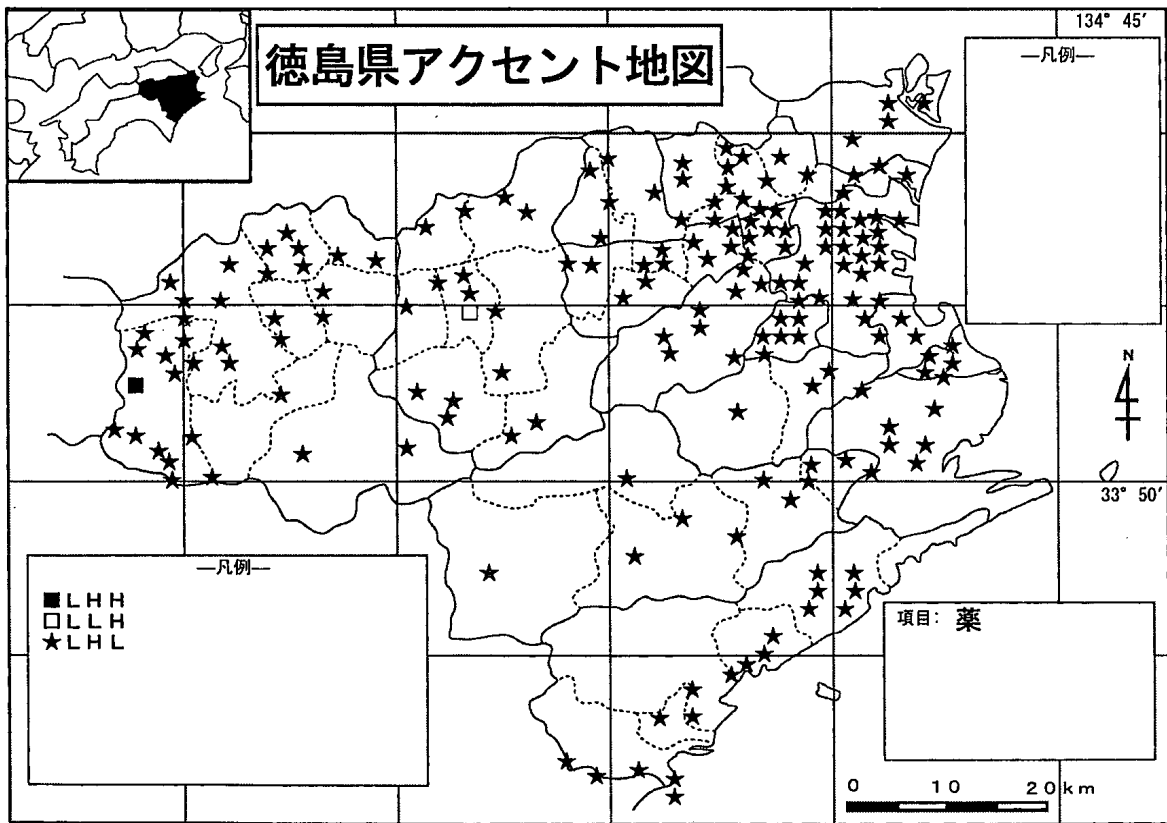


図33

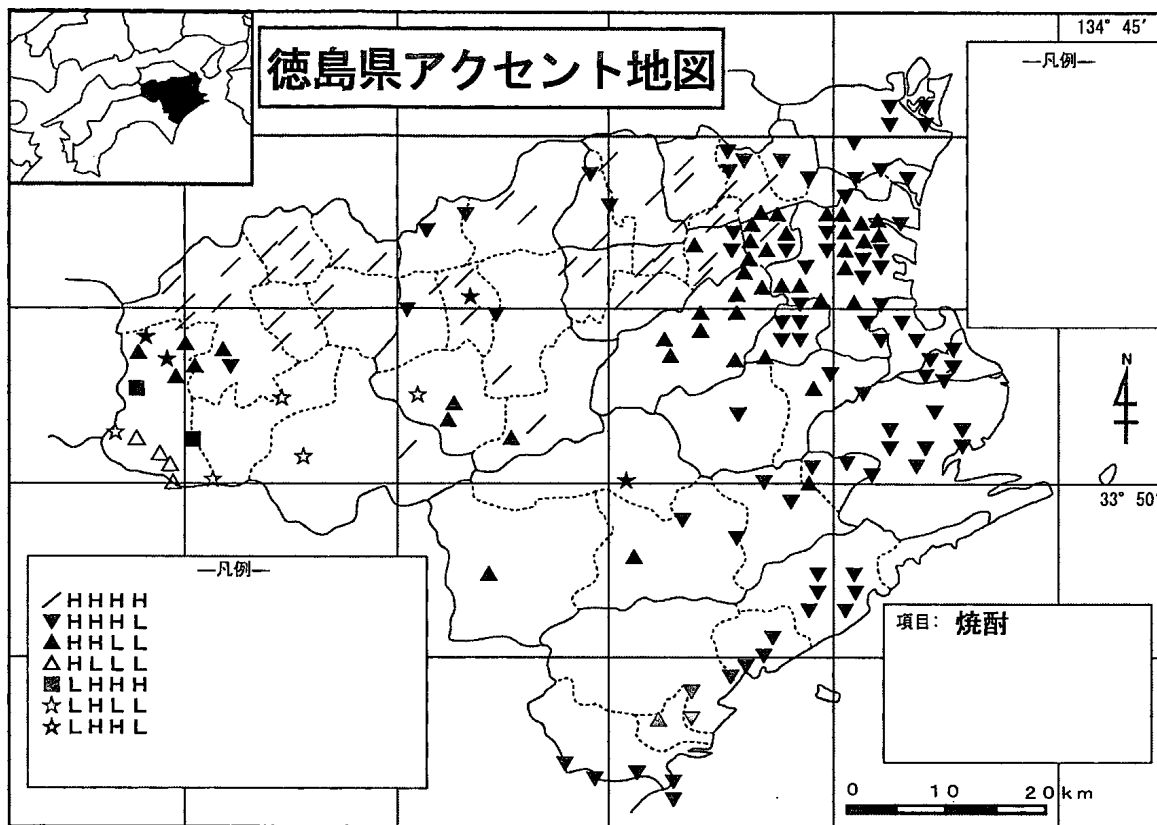


図34

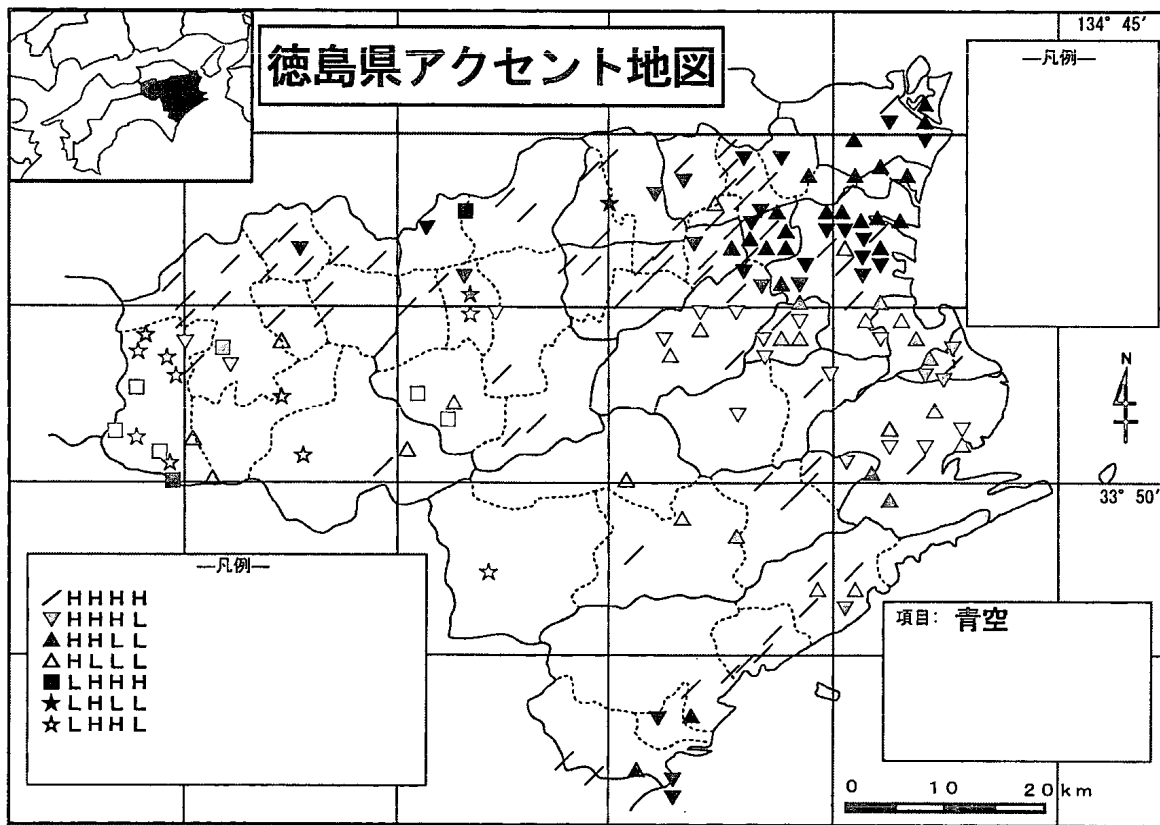


図35

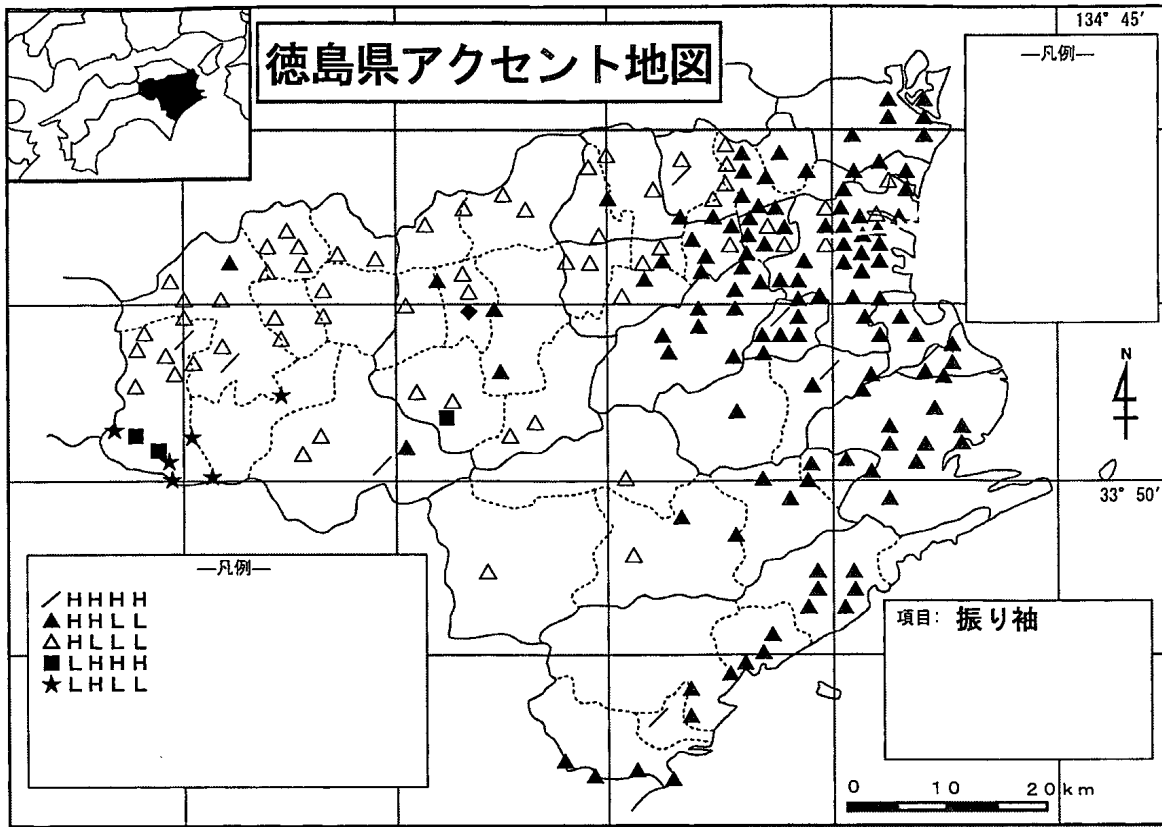


図36

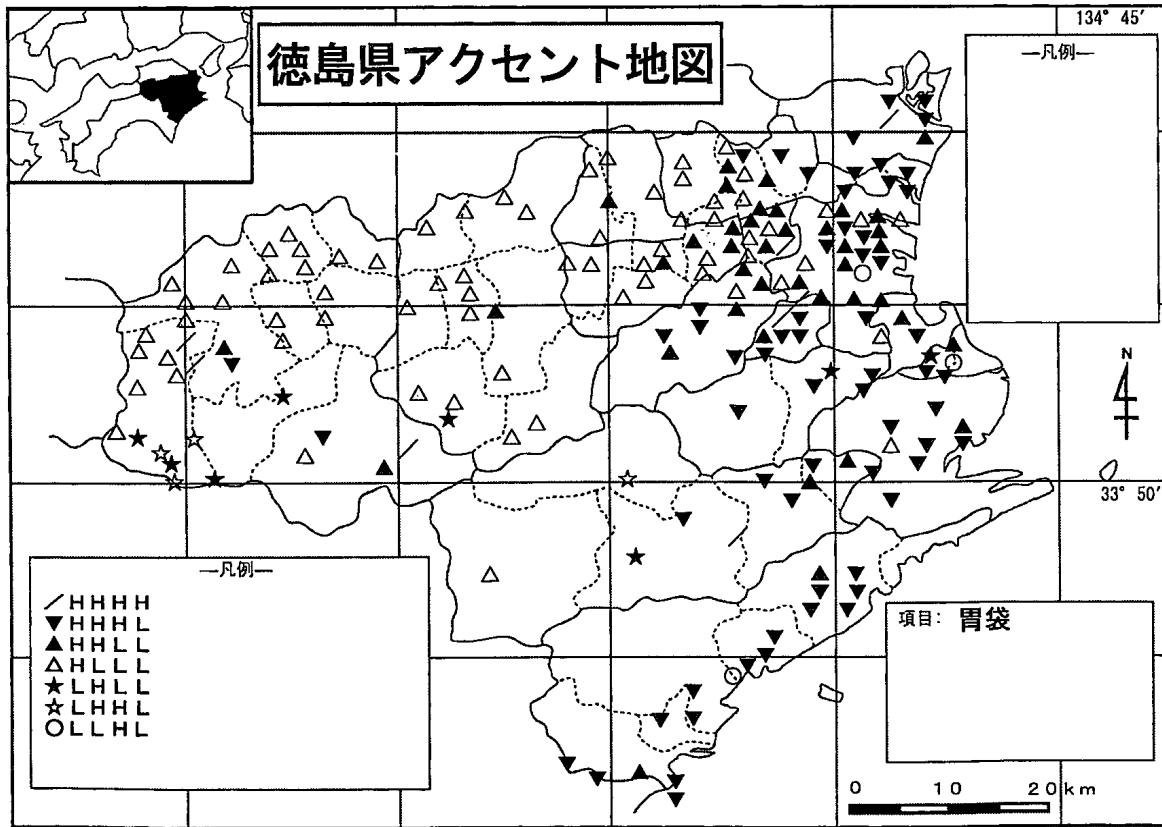


図37

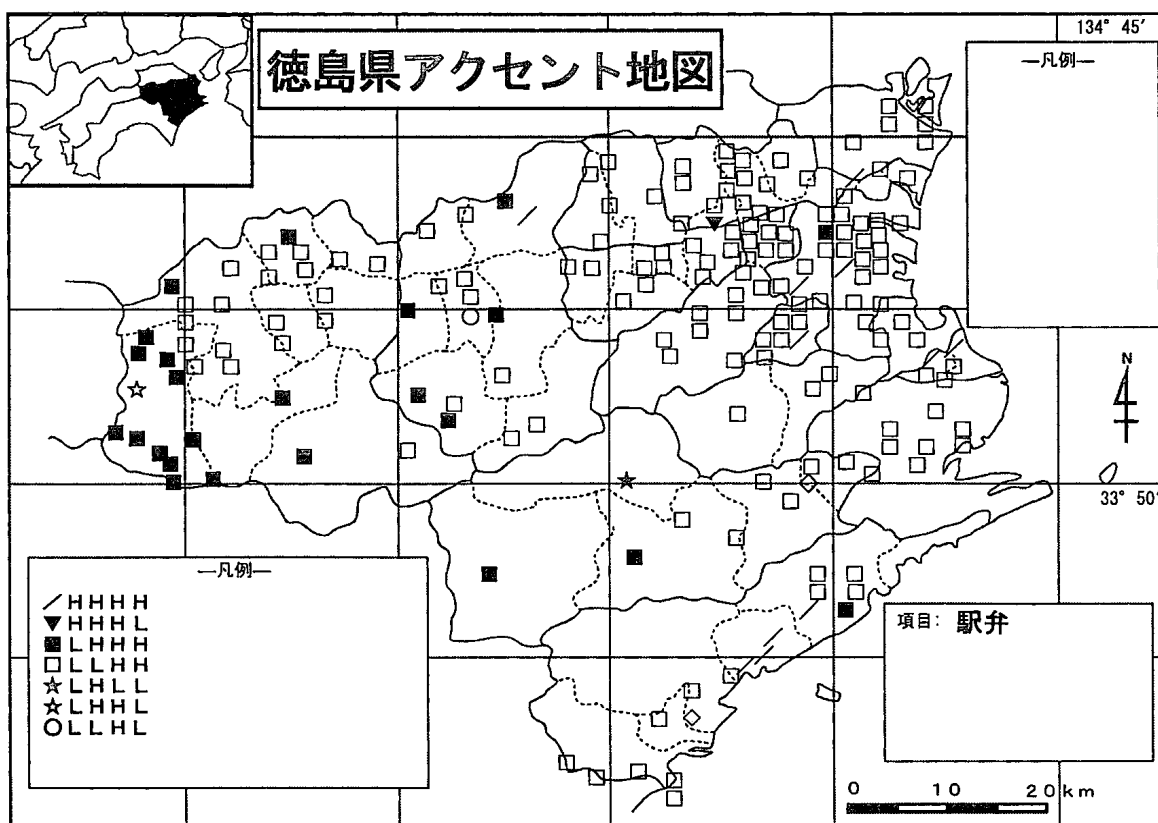


図38

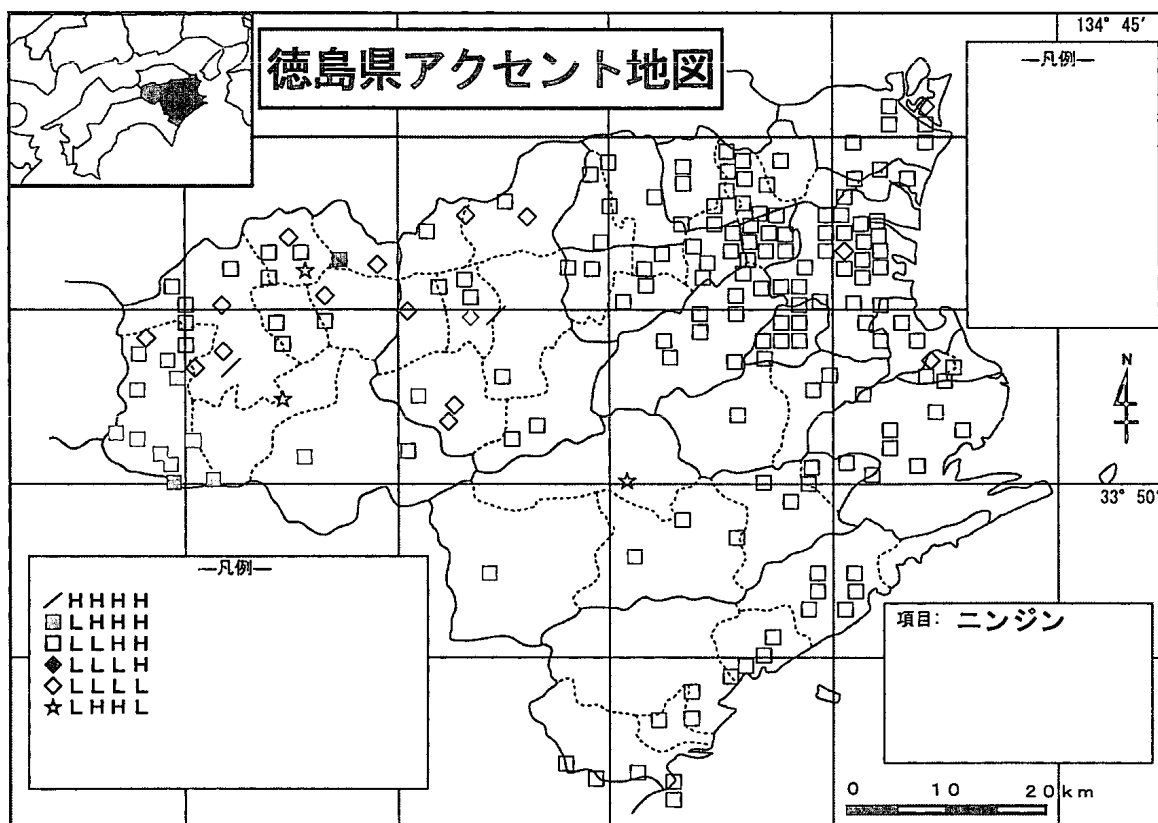


図39

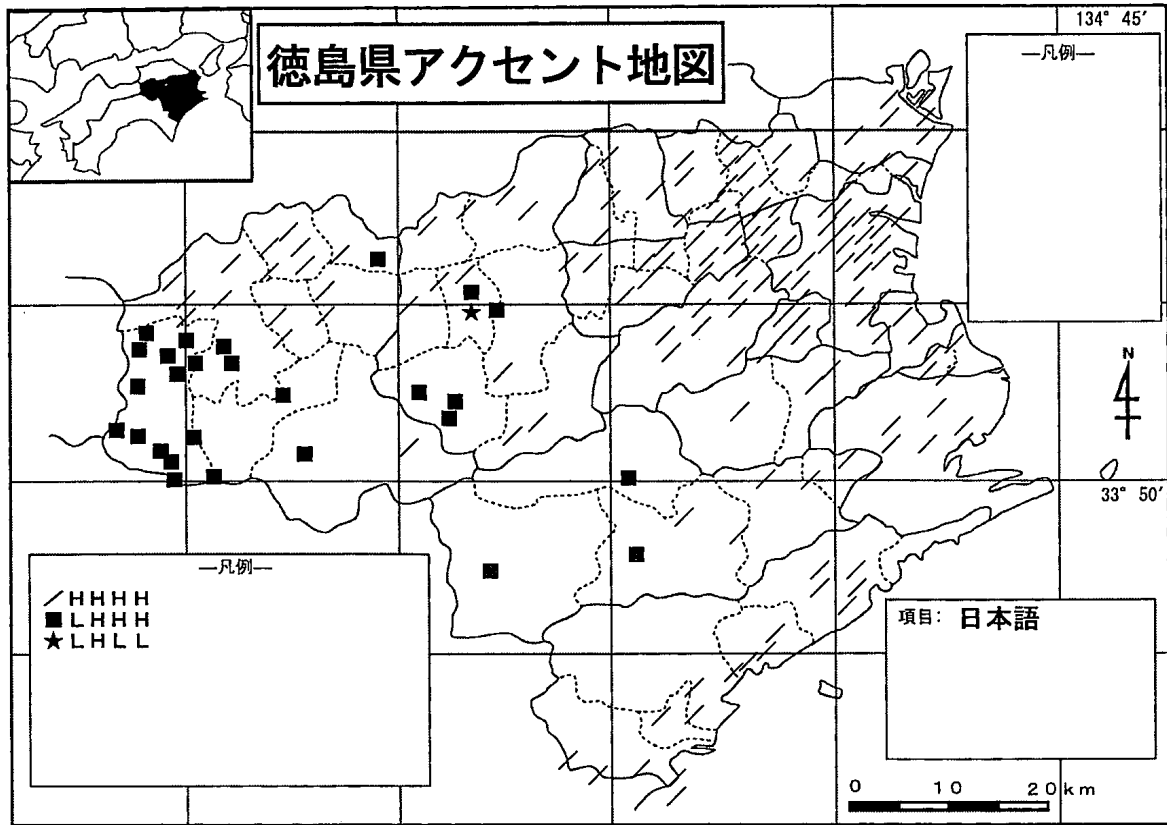


図40

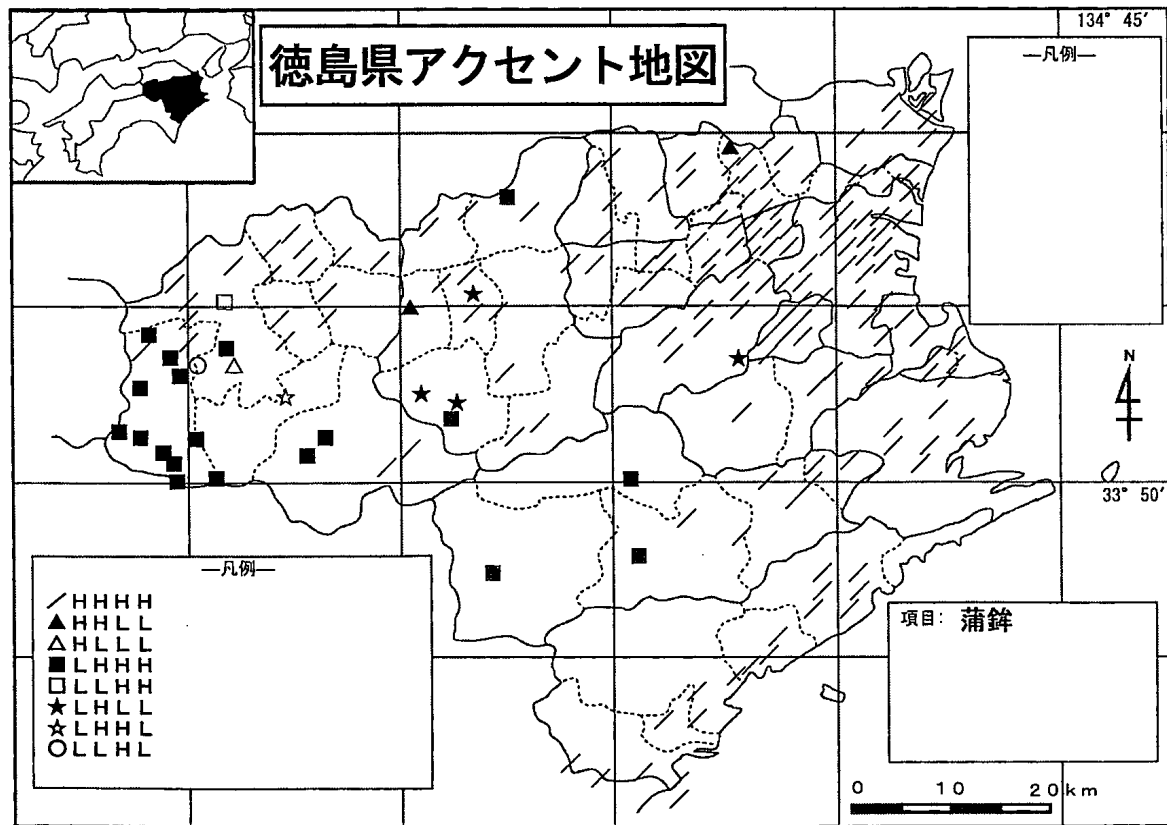


図41

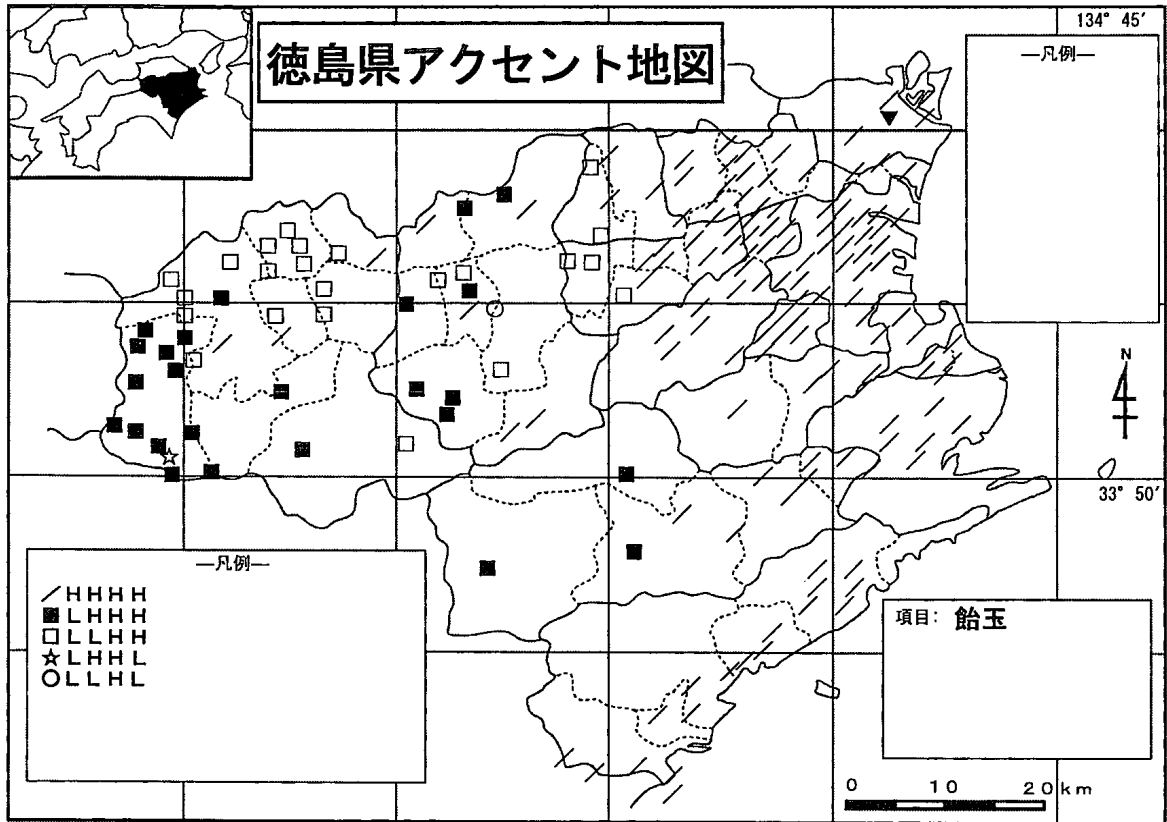


図42

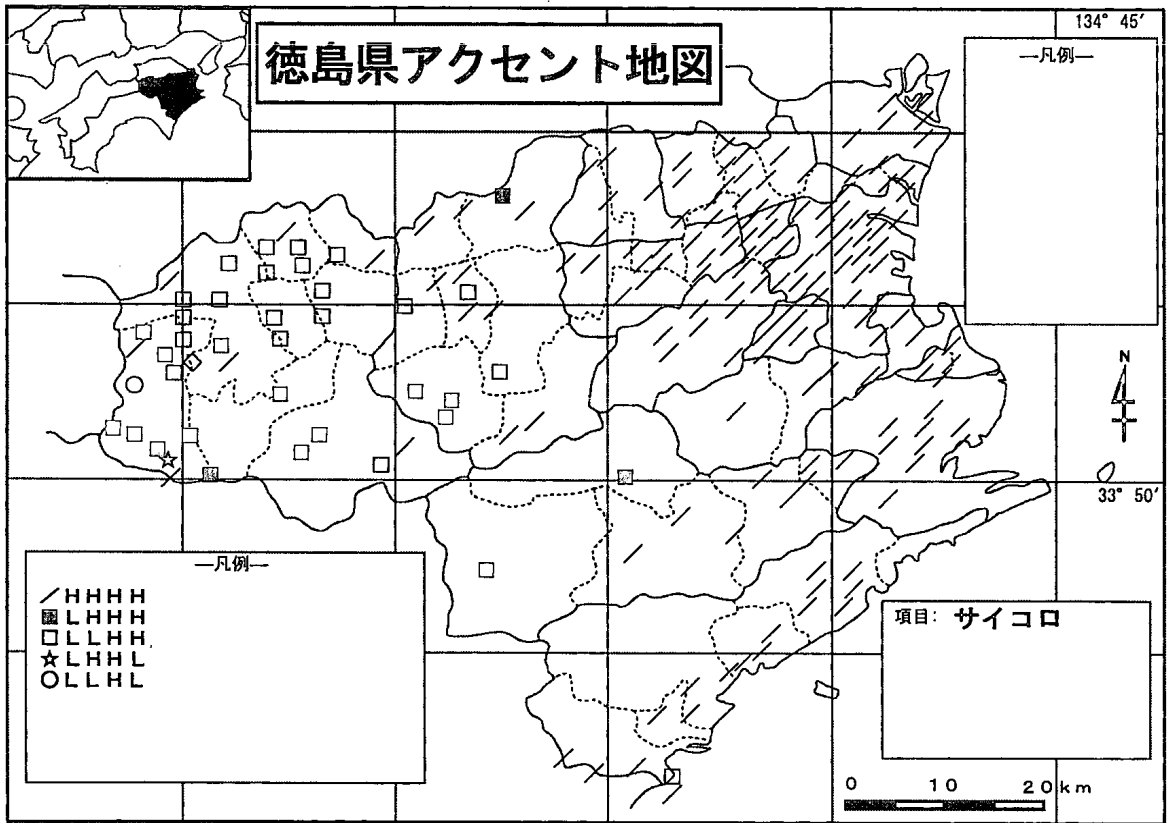


図43

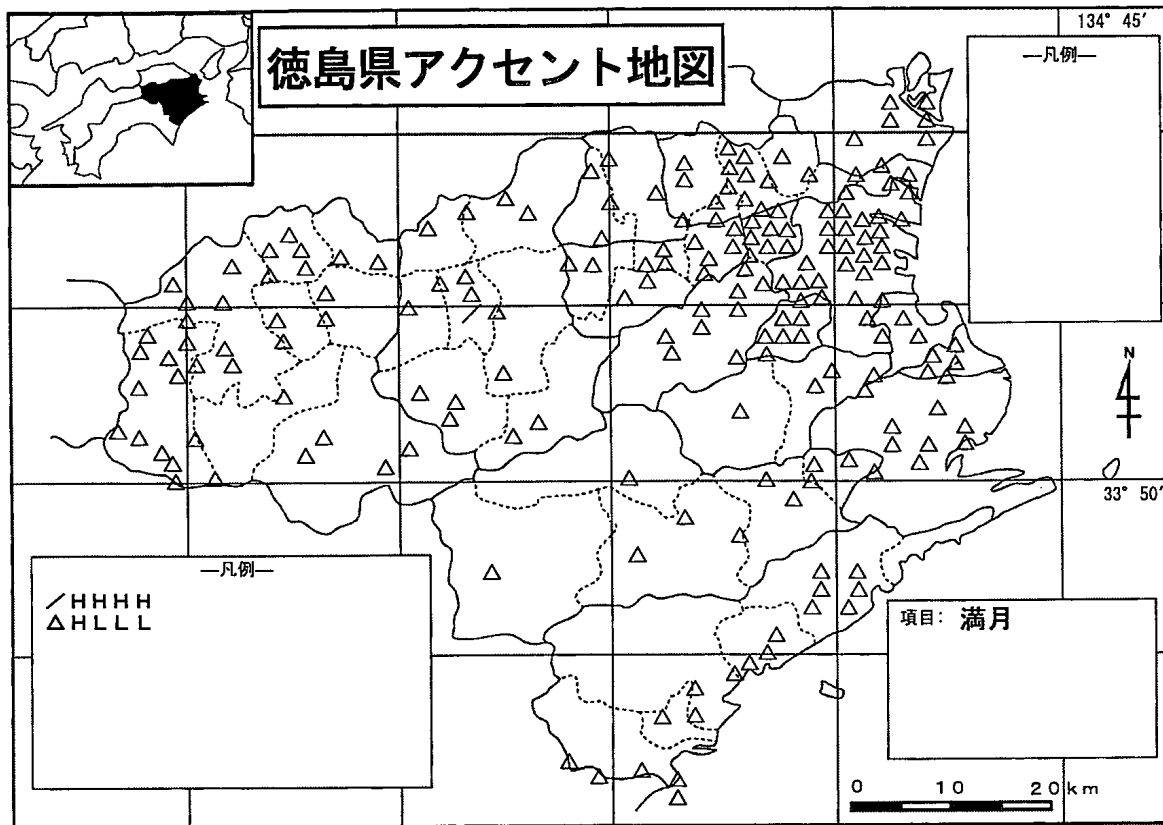


図44

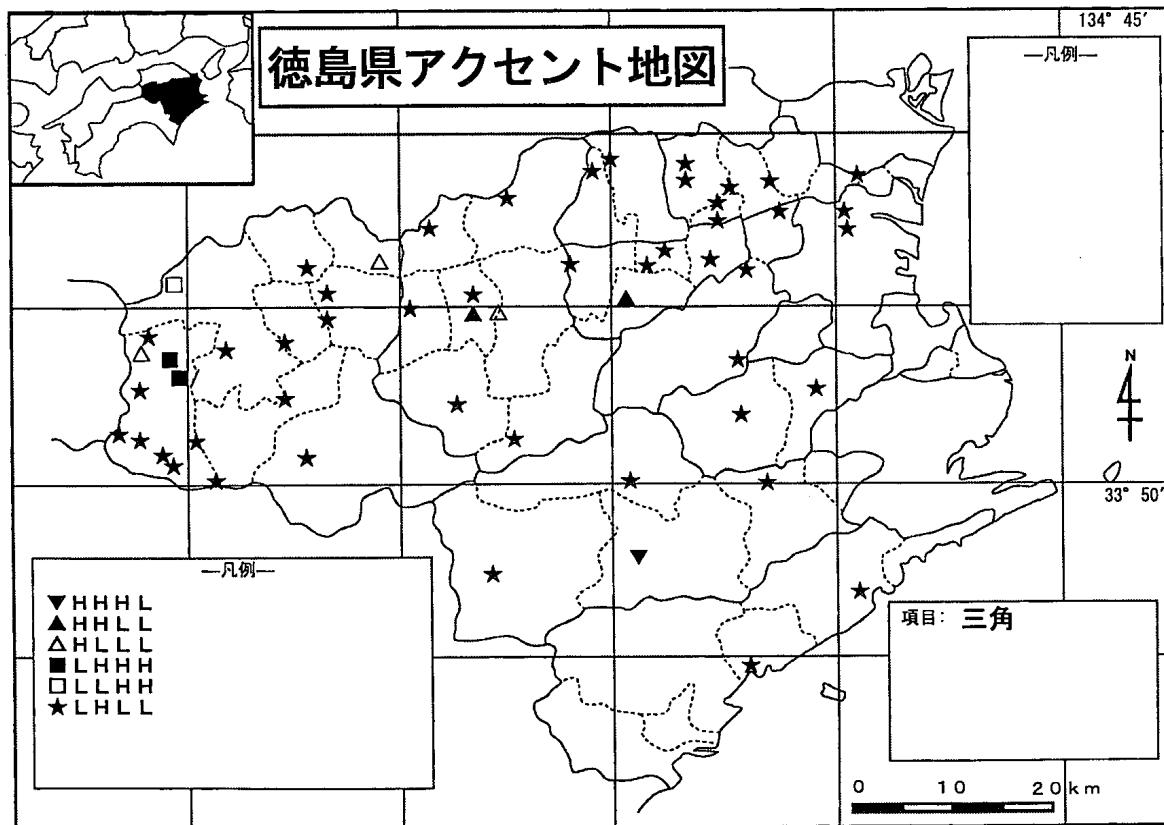


図45

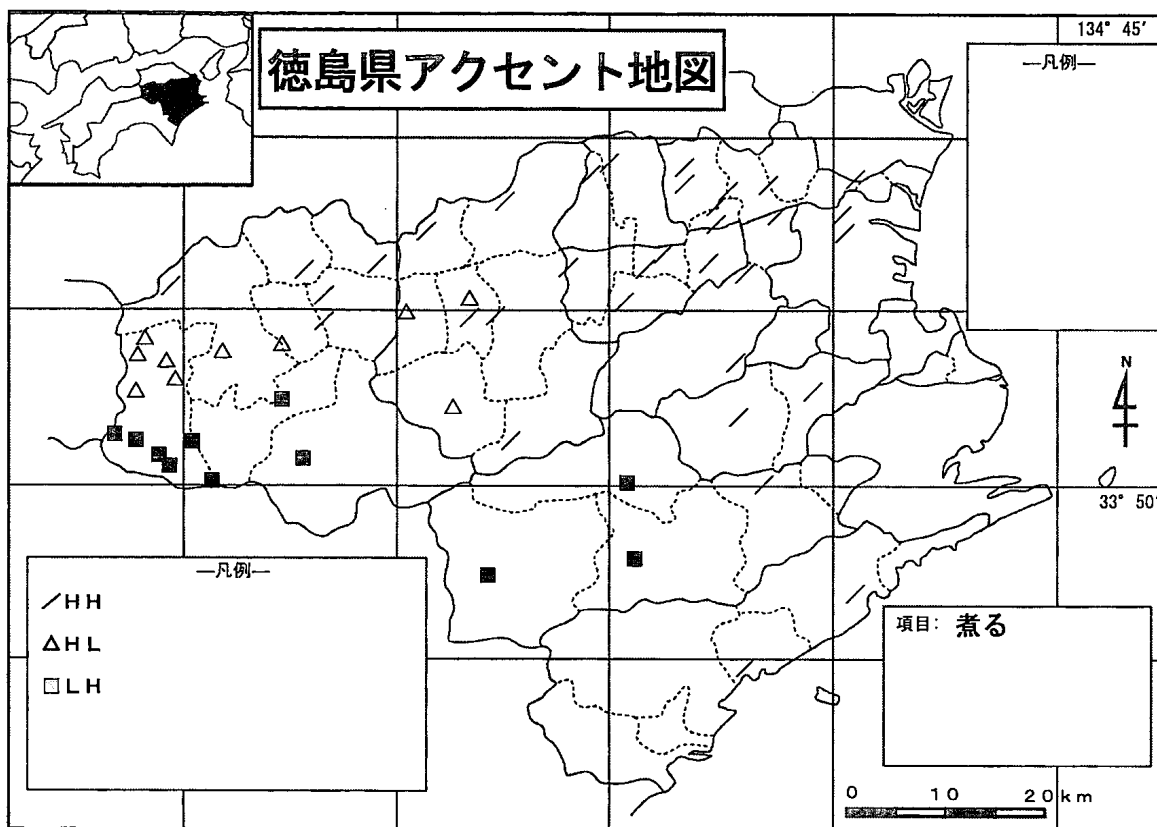


図46

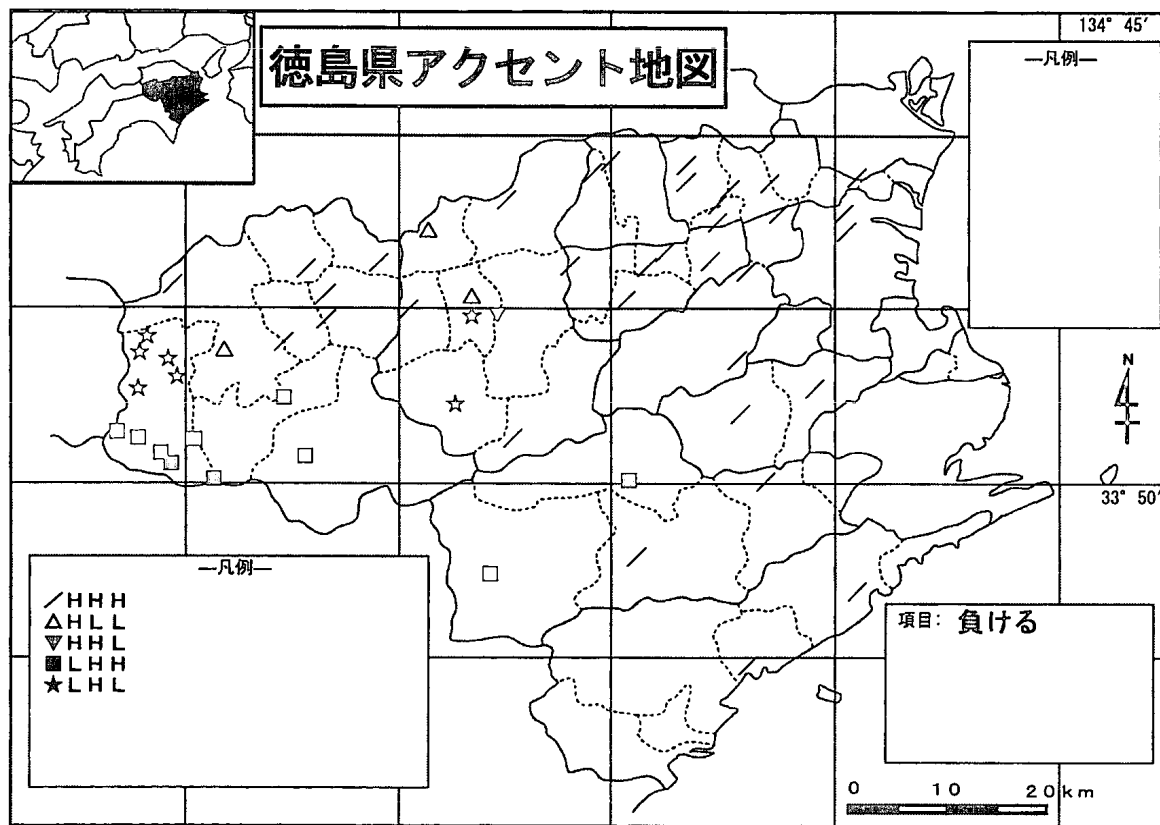


図47

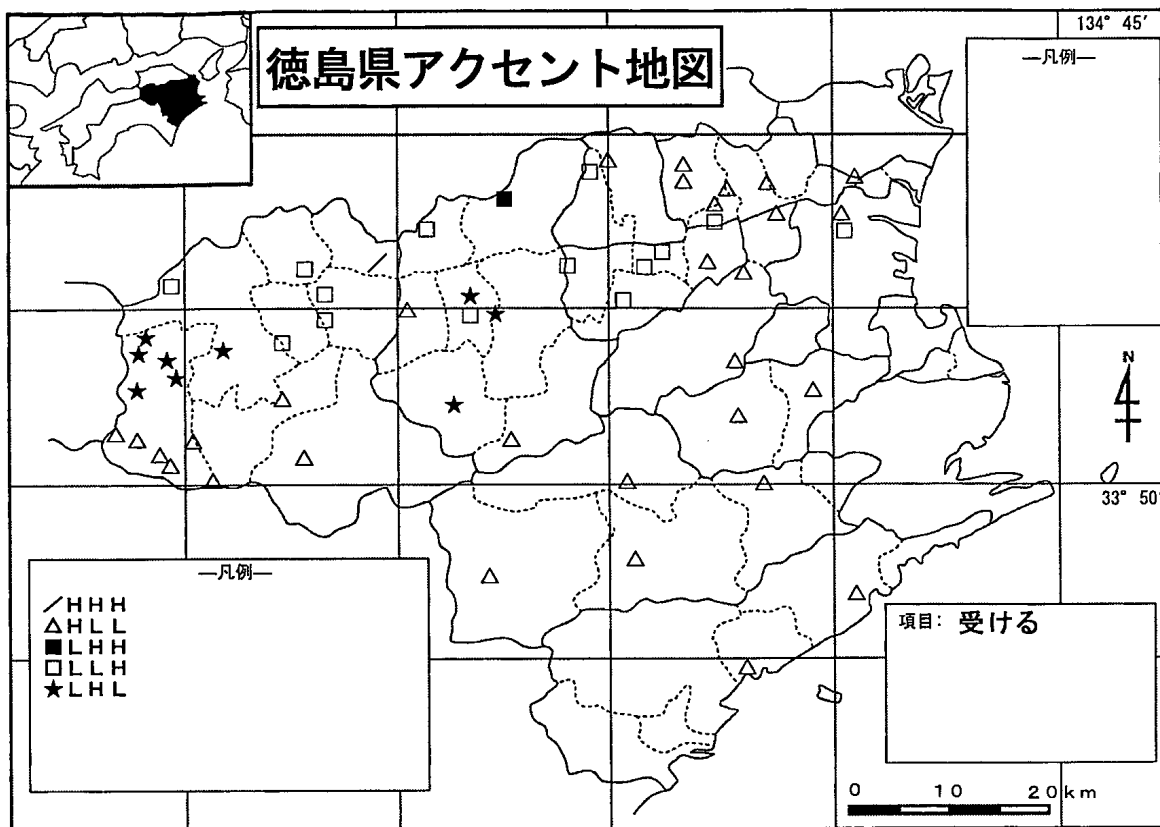


図48

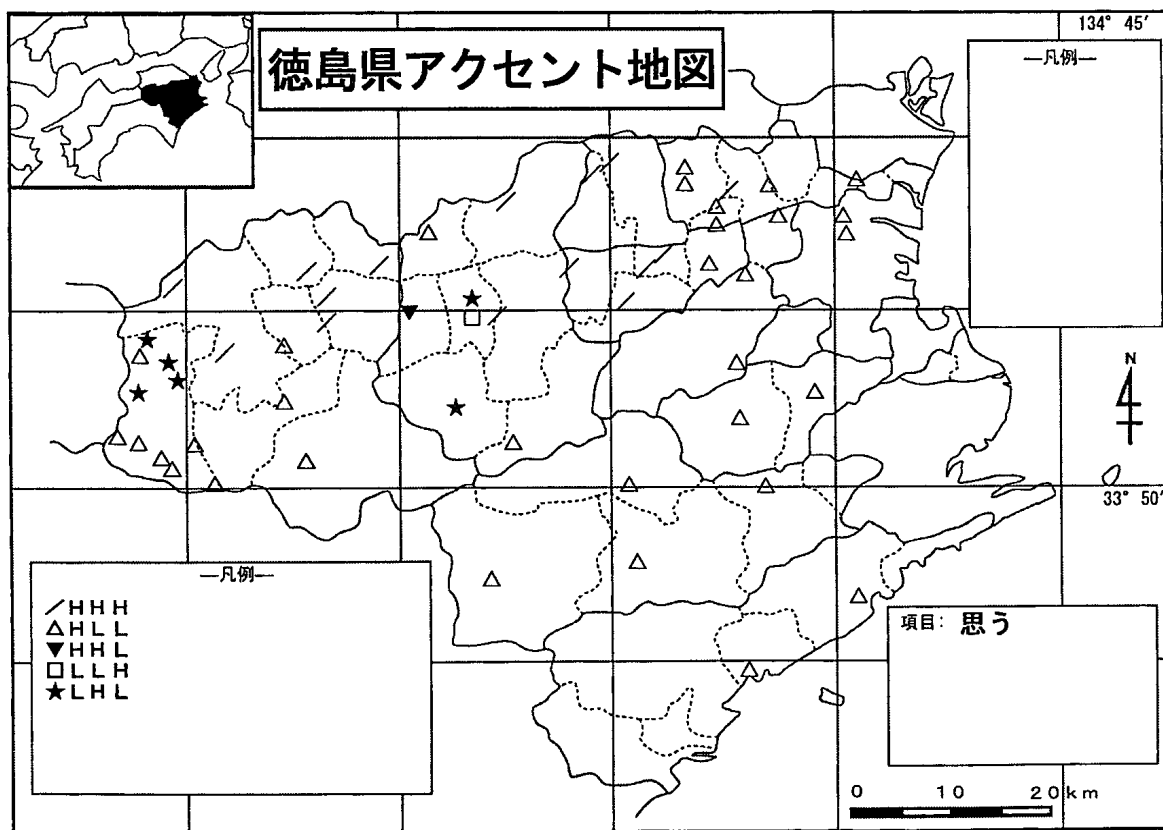


図49

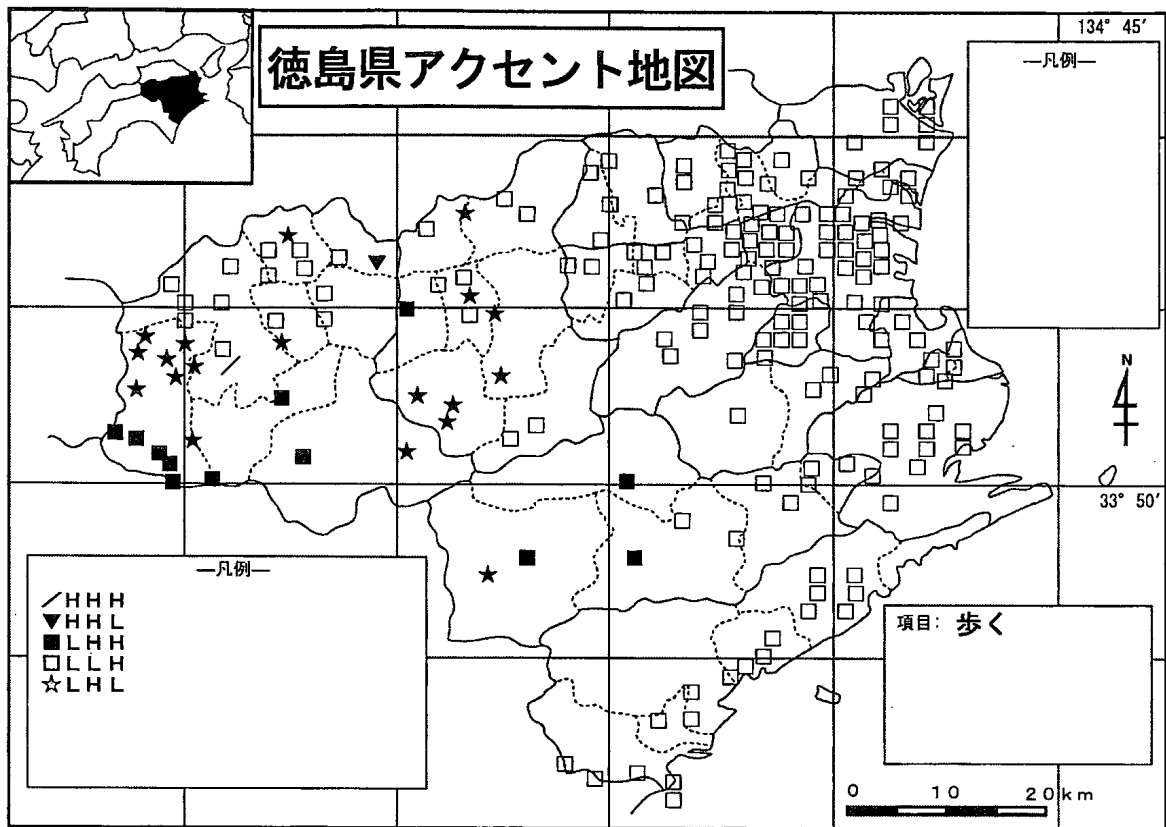


図50

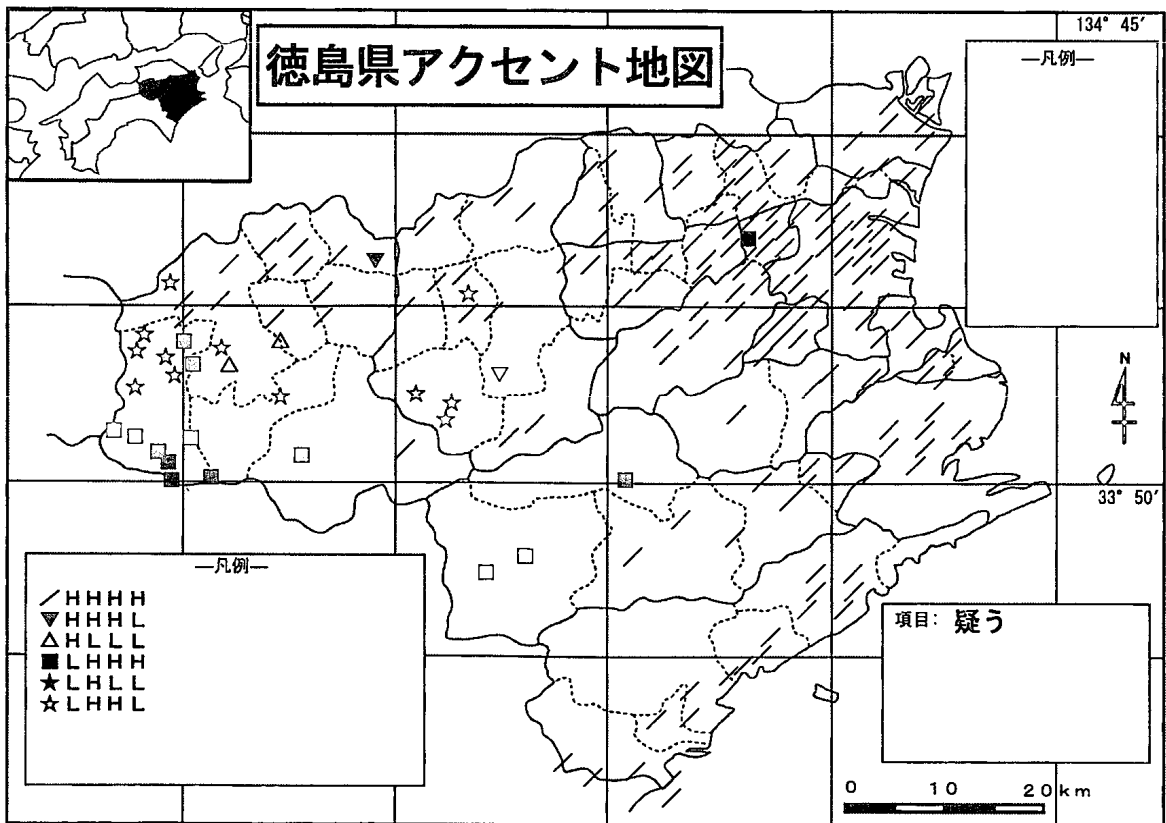


図51

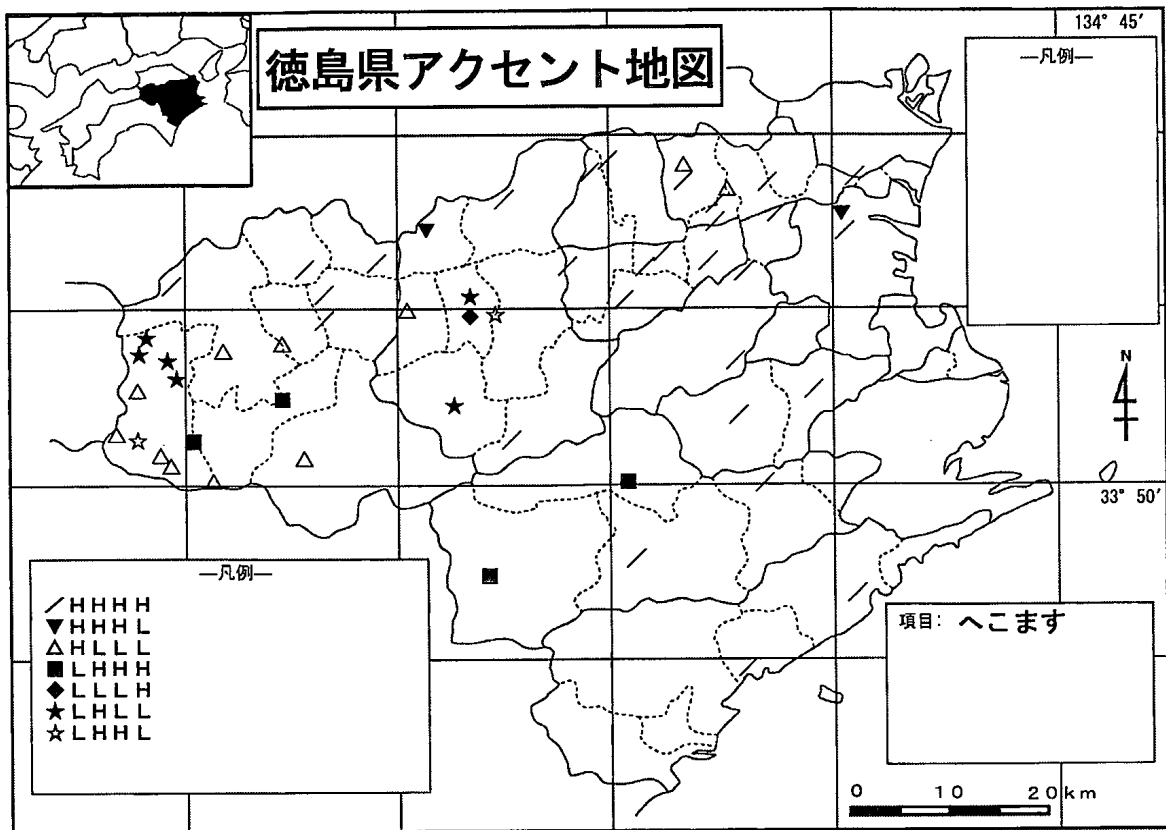


図52

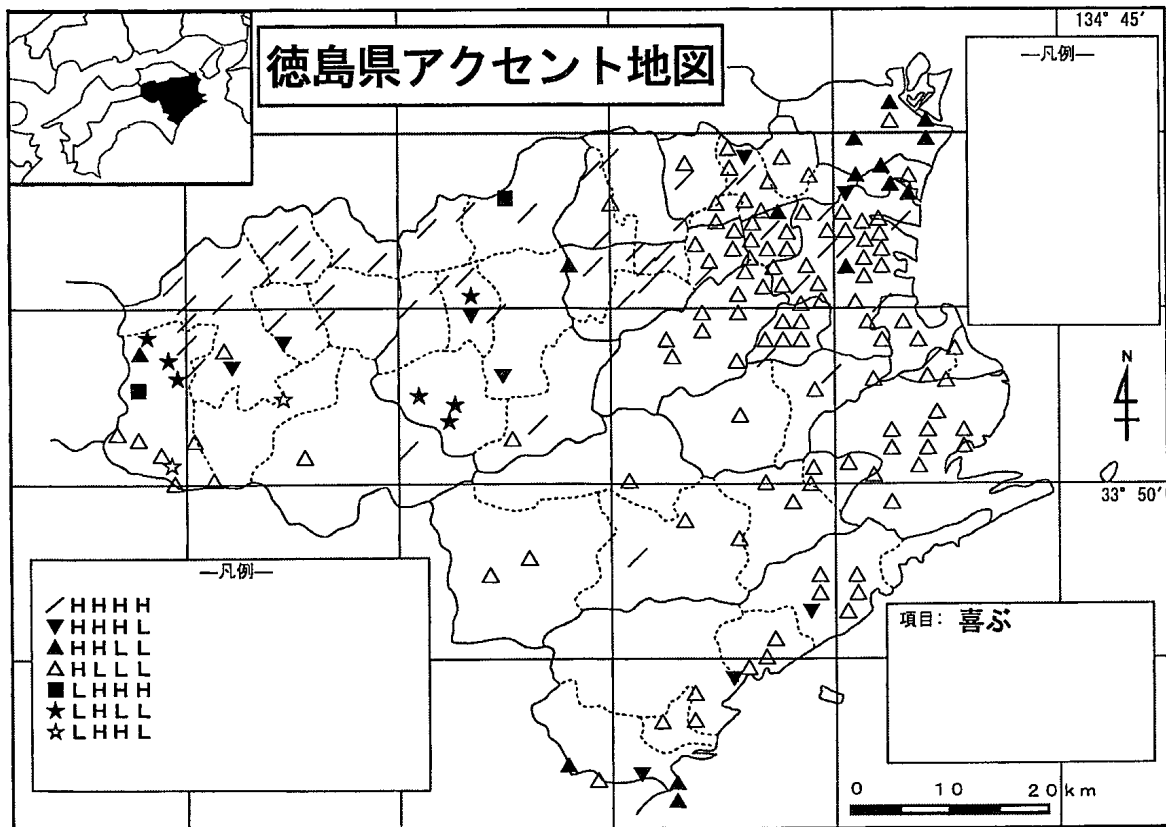


図53

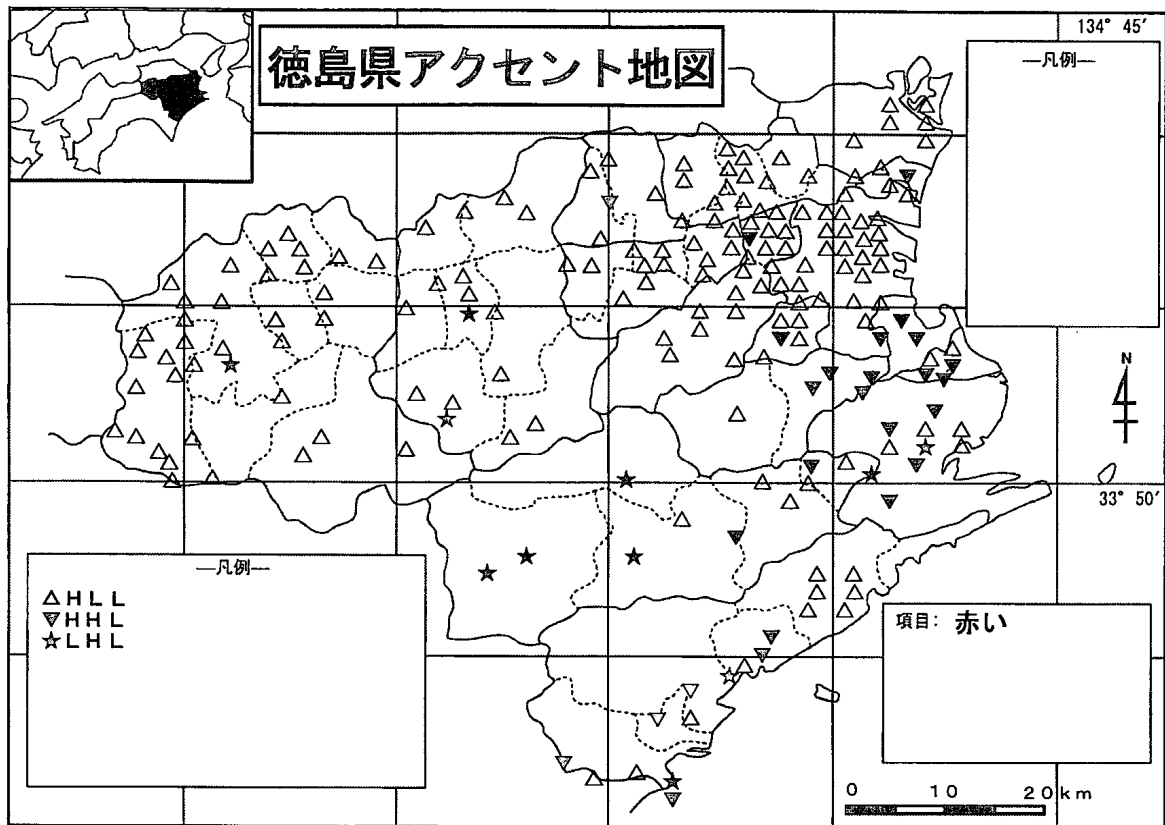


図54

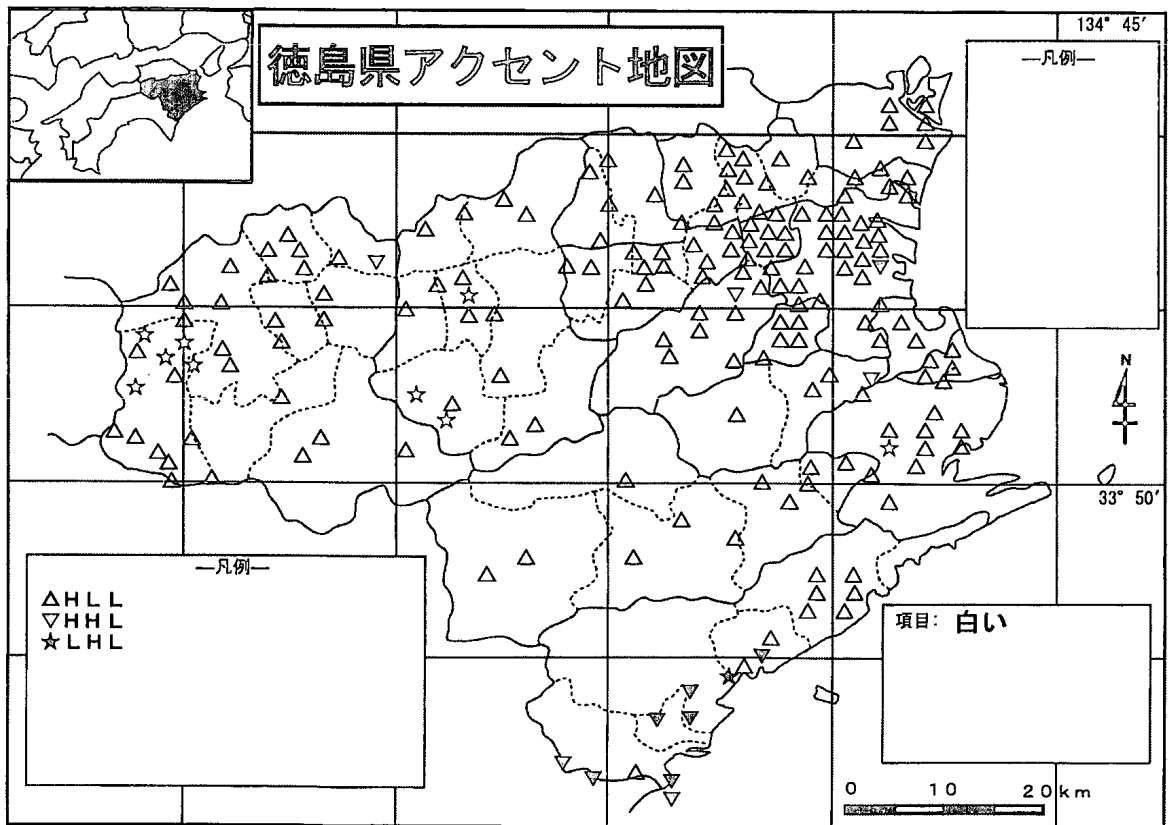


図55